
この赤い世界で.....

アマゾン滝沼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この赤い世界で……

【Nコード】

N9003L

【作者名】

アマゾン滝沼

【あらすじ】

夜に怯える少年、秋山。

今まで不安を覚えてつつもやり過ごしてきた彼だが。ついに、”恐怖”がその姿を……！

第一話（前書き）

連載ものですが、よろしくお願いいたします。

第一話

赤い世界で

五感が狂う。

視界に映るのは真つ赤な世界といくつもの黒い線。

聞こえるのはうめき声と負の願望。

鼻の奥で生臭く臭う、錆びた鉄のような刺激臭。

針でくすぐられるような緊張感を素肌を感じる、鳥肌が立つ。

味覚が感じるのは、獣臭い血の味。

怯える、漆黒の世界の中で怯える。今までずっとそうして生きてきた。無駄にあがいて、今以上の恐怖に襲われたくないから。恐怖を、真実を探る勇気を心の奥底にしまいこんでいた。

r・1

南条市なんじょうしの外れにある薄汚れたアパート。外壁ぼろぼろ、手すりハサビサビ。階段もドアもサビサビ。それが柴田荘。

その三階、303号室。表札には「秋山」と書いてある。

太陽は東から昇る。この部屋は西側にしか窓が無いため朝日が差し込まない。よって部屋の朝は薄暗い。ごく普通の一般的な高校二年生である秋山良一あきやま りょういちにとって、そのことは私生活に支障をきたす要因となる。

とにかく朝が起きられない。目覚まし時計を二つセットしているが、無意識のうちに消してしまふ。

一人の女性が部屋に入ってくる。

全然起きる気配の無い良一をいつも起こすのは四つ年上の姉、秋山美香きやま みかだ。すらっと伸びた長い足としなやかで美しい腕。適度に締まったウエストは魅惑の臀部を引き立てる。長い茶色の髪は近寄ると何だかおフランスな香りが漂い、気の強そうなその目で睨まれた男は例外なく畏怖と憧れの念を抱いて顔を赤らめることづけあい。そしてそんな彼女のバストは…… Aカップ、だ。

ちなみに彼女の前で胸のことを話すのは自殺願望があるとき以外やめておいたほうが良い。学生時代に柔道をやっていて、しかもかなりの腕前だ。そこら辺の男くらいでは弥彦山とチョモランマほどの格の差がある。

4月13日の朝。薄明るい部屋の中、メインの部屋に調理の音が響く。テレビなどの明るい音が無くてノスタルジイな感を受ける情景だ。その緩やかな朝の一時に、椅子に座ってうなだれている少年の姿がある。濃い影を落としながら彼はぼつりとつぶやく。

「姉さん…… やりすぎだよ」

そう言って首をさする良一の表情は朝帰りのサラリーマンのように疲れきっている。五分ほど前にくらった横四方固め。起きた後に一周して永遠の眠りに着いてもおかしくない程の破壊力だ。目覚ましレベル1000と言える。

頂を垂れる良一の眼前に美香の手料理が繰り広げられる。ガラス
つばいが実はプラスチックのコップに注がれた水。ジップロックに
密閉されている漬物。“ジューワァー”と熱々の湯気をこれ見よ
がしに見せ付けているのはハンバーグだな？

「やあっほあゝい！ 今日の朝ごはんはハンバーグだあ！」

と、小学校低学年の腕白少年は喚起するところだろう。しかし高
校二年の良一から出るリアクションは、熱々のハンバーグとは対照
的に実に冷めたものだ。

「また朝からハンバーグ？ ……姉さん」

朝が苦手な上に寝起き。しかも毎日朝はハンバーグ。別にハンバ
ーグが嫌いというわけではない良一だが、さすがにこのシチュエー
ションでは食う気にならない。

「グチグチ言ってないでさっさと食べちゃいなさい。学校に間に合
わないわよ」

エプロンをはずしながら良一をせかす美香。パンダさんの刺繍は
彼女の“弟”が施したものだ。

「そんなこといったって……。朝からこんな脂っこいの食いたくな
いよ。しかも毎日」

フォークでハンバーグをつつきながら愚痴をこぼす。染み出す肉
汁が鉄板の上で暑苦しく音をたてる。

「そんなこと言わないでよ。せっかく苦勞して作ってるんだから」
椅子に座ると嬉しそうに肉塊を見つめる美香。

「いや、ほかのやつを作れば良いじゃん。トーストとかご飯にふり
かけとか。何ならコーンフレークでも良いし」

カチカチと皿の淵で鳴るフォーク。

「ほかのじゃだめなのよ。姉さんがハンバーグ大好きなの、知って
るでしょ？」

おもむろにイチゴジャムを取り出す美香。キャップを外すと、コ
レでもか！ とハンバーグを異色の世界へと連れ去っていく。その
様子を見る良一の食欲はますます衰退の一途を辿る。

「いや、そりゃ知ってるけどさ。ていうか姉さんがハンバーグ食いたいだけなんだから別メニユーでよろし……」

「るっせえ！ 黙って喰え！！」

チワワも硬直する姉の一括に弟はすっかり萎縮してしまった。しぶしぶハンバーグを食べ始める。やけに美味しいハンバーグを食べながら、良一は痛む首筋を優しくさわった。

どうにか支度を終えて家を出る。嫌な起こされ方をしたせいか、朝から気分が悪い。そんな良一の気分と違って今日はとてもよい天気だ。スズメたちの鳴き声がなんとも爽やかで心地よい。

公立寺地高校。創立二十周年を迎えた学校の校舎は見かけから古びていて中も汚い。校舎の隣にある去年新設されたばかりの新品ピカピカの第二体育館が、よりいっそう校舎のぼろさを引き立てている。全体的にありがちのクリーム色でいまいち色感が薄いこの学校の中で、一際目立っているのは正面玄関前にある桜の木である。

四月、まさに今季節に毎年満開に咲き誇る桜。この桜のおかげで正面から見た学校はともに見栄えが良い。まあしかし元が元なので、桜の花も草も散ってしまう冬には見栄えもへったくれもあったものではなくってしまいが。

「うオッホウ！ 良一、今日も覇気が無いな。ハハハハッ！！」

騒がしいやつが良一に話しかけた。校舎西塔の二階奥にある二年六組。その中で一際五月蠅い男、高田^{たかだ}恭平^{きょうへい}。良一の中学以来の友人で楽天的かつ声が不必要にでかい。

「俺は低血压なんだよ」

しぶしぶとハイテンションの恭平に対応する良一。

「低血压ねえ……。んなもん牛乳飲んでりゃ治るって！ ビタミン
凄いいから！」

恭平は何の考えもなしに物事を言うので、彼の言うことを真に受

進級してクラスが変わったので知った顔が少ない。なにせまだ始業式から二日しかたっていないので、新たな友はまだできていない。だから休み時間などは良一、恭平、奈緒の三人はだいたい一緒にいる。もつとも、恭平はすでにクラスのムードメーカー的な立場を確立しつつあるが。

「よう、奈緒。いやさ、さっき俺ん家の姉さんの話をしてね……」

「ああ、なんだ。新学期最初のトランスね」

奈緒は慣れた様子でかばんの中身を出し始めた。実のところ恭平の“美香ラヴトランス”は毎度おなじみのことで、多いときは週一で発生する。

始まりは中二の夏。初めて良一の家に恭平が遊びに来たとき、恭平は美香を見た。会っただけで惚れてもおかしくないのだが、白いＴシャツ越しにブラが透けて見えていたという衝撃現象（思春期恭平にとって）が彼を完全にスパークさせた。後に高田恭平は語る……。

『あの瞬間、俺の体を閃光が貫いたんだ。自然と体が反応しちまったよ』

恭平は猛り狂う獅子のように果敢に美香に襲い掛かった。そのとき美香が繰り出した恭平への背負い投げは、柴田荘303号室前の鉄柵を痛々しく凹ませた。鉄柵は今もへこんだままだが、実際見てみるとその衝撃の凄まじさがわかる。

「良一くん、なんか元気なさそうだね。大丈夫？」

恭平を無視して奈緒が良一に話しかける。

「まあ…寝不足とかいろいろと重なってるからね。ちょっと疲れているだけさ」

精一杯明るいトーンで答える良一。しかしその疲労の色は隠しきれない。恭平も奈緒も真っ先に気づいたように、今日の良一はいつもより一層疲れているように見える。普段から疲れた顔をしている良一だが、それにしても今日は疲労コンバイしているようだ。

横四方固めのダメージもあるのだが、大きな原因は寝不足のほう

だろう。それと精神的なストレス。原因はわれている。

ここ数年、毎晩のように異常な感覚に悩まされてきた良一だが、ここ最近は特に酷い。夜の七時にもなれば町のいたる所から獣のうめき声のようなものが聞こえてくる。そしてそれに連動するかのようを感じる悪寒。

得体の知れない不安感に怯える毎日。最近、眠れない夜が続いている。

「きりーつ。れー」

委員長の号令の後、教室中が開放感に包まれた。ガタガタと机の動く音が放課後の雰囲気を一層漂わせる。掃除係が掃除のはじめにゴミ捨て係をジャンケンで決める。そういえば、来週は俺が当番だ。

「じゃーねえー」

「また、トウデイに会おうぜ」

「トウモロウだろ。じゃーな」

恭平と奈緒とは校門の前で別れる。やつらは電車、俺は徒歩で二十分の通学だ。帰るときは早足で、部活なんてもつてのほか。空が暗くなる前に帰らないといけない。まあ、今日は六限だから少しだけ寄り道できるが。

アパートの近くにあるコンビニ、マースンで週刊誌とついでにポピコを買う（ポピコ：ポブという名の筋肉隆々のマッスルスターをかたどったスナック菓子。イチゴ味のチョコが入っていて異常にうまい。¥58円）。

店を出ると赤い夕日が顔を照らす。都会の夕日は綺麗だというのが、まんざら嘘でもないなと感心した。

ビニール袋をぶら下げてサビサビの階段を上り鞆から鍵を取り出す。一見お遊戯の小道具？とも思えるが、立派にマイホームの鍵だ。ピッキングされ放題に思えるが、空き巣に入られたことが無い我が

家。た またま目をつけられなかっただけ（金が有る家に見えねー。むしろ実際無い）だと思うが。

古のダンジョンの扉が開くような音。そろそろ油を差さないといけないな。

「あ、お帰り〜」

玄関のドアを開けると間の抜けた姉の声が聞こえてきた。

「あれ、姉さん。帰ってたんだ、早いね」

いつも姉は六時過ぎごろに帰ってくるのだが、今はまだ四時。

姉さんはクッションの上にひじを当てて、横になってドラマの再放送を見ている。いつだか流行った韓国のソナタだ。

自分の部屋に入ると、まず電気をつけてカーテンを締めた。外の光、音が入ってこないように。気付けば日課になっていたこの行動。それが終わったらフリー・タイム。ビニールの袋からポピコと週刊誌を取り出す。大好きなギャグ漫画からスタートして、好きなものの順に読んでいく。最近は読むものが少なくなった気がして少し寂しい。

ひとしきり読み終わったら隣のリビングへ。姉さんの姿は無い。テレビをつける。そしてゲームの電源を入れる。テレビは個々の部屋には無く、リビングのみにあるのでゲームはここでしかできない。コントローラーを手にしたところでカーテンが開きっぱなしだということに気づいた。

時間は五時半、外はだいぶ暗くなってきている。

「……」

！ やばい。今かすかにだけどうめき声が聞こえた。急いでカーテンを閉める。もう、そんな時間か。

鼓動が早くなるのを感じる。ああ、今日もまた夜が来るのか。

不安を少しでも紛らわせようと思って、ゲームの画面に集中する。時計の音が嫌に気に耳につく。不快を感じる……。

「良〜」。なんか今日ご飯作る気がおきないから、今夜外食でいい

？」

不意に姉さんが提案した。

「やだよ、外食なんか……」

夜の外食なんてありえないことだ。外で食うのが嫌とかそんなじゃない（ま、確かに姉と二人で行くのは何かやだが）。問題は店に行くまでの道中。もしどうしても行くのなら、鼻まで覆えるマスクとサングラス、それにヘッドホンか耳栓でもして厚着をしていかないとだめだ。いや、それだけじゃ不安……。

とにかく家から出てはいけない。どんな対策をしても、外の世界であの感覚に耐えられる自信は無い。

「まったく、どうしてあんたは外食を嫌がるかな。さては、お姉ちゃんと出かけるのが恥ずかしいのかな？ 思春期少年め」

呆れ顔でこつちを指差す。少年には少年なりのデリケートな問題があるので、ほっておいてほしいものだ。

「しょうがない、今夜はコンビニ弁当にするか！ ご注文は？」
財布と携帯をポケットに入れながらメニューを聞いてくる。

「……蕎麦」

「そば？ いいけど、栄養が足りないわね。プラスでサラダも買ってくるからね。」

ばたばたと玄関に行つてドアを開ける姉さん。開かれたドアの先がとても不安なものに見える。少なくとも、俺にはそう見える。

「あー、そうそう。ちゃんと鍵かけときなさいよお」

「子供じゃないんだから……」

ポツリと独り言。姉さんは聞こえたのかどうか、一瞥をくれるとバタバタと外に出て行った。

一人になつて、部屋にある音はゲームの電子音とボタンを押す音だけ。静かな平穏の中に実を置きつつも、心中に巣くう正体不明の騒ぎが平静を乱してくる。

今日はなんだか調子が悪い。CPU相手に大苦戦の有様。この分

だと姉さんにも負けそうだ。

「調子わりーな……」

ポツリとつぶやく。でも、それはちがう。調子が悪いのではなく、ゲームに集中できないから勝てない。

なぜ集中できない？　どんどん不安が膨らんできているからだ。近づいて来ていると言ったほうが適切かもしれない。いつも感じる夜に対する不安感とはちよつと異質な感じた。なんだ、この嫌な感じは。とても悪いことが起こりそうな予感がする。……そういえば、この感覚はいつか体験したことがある。

そう思った瞬間、俺の人生の中でもつとも恐ろしく、悲しくて理解しがたい記憶がよみがえってきた。

真つ赤に染まっている景色の中で倒れこんでいるのは母さん。もつとも、その場面だけでは母さんだと判別できない。ただの黒い枠線だ。その横に立っているのは人なのかなんだかよくわからない真つ黒な塊。

まるですべての色という色が真紅に染まり、光も影も存在しなくなってしまったかのように極端な情景。ひたすらに赤い世界に違和感なく存在している黒い線は、何かをかたどっているようにも見える。

「……っ！」

思い出したくない！　考えたくない！

ぶんぶんと首を振って、記憶の場面を散らす。悪夢のような記憶から逃げる。

「っ痛！」

……首を痛めていたことを忘れていた。

夕飯を食い終えてからテレビを見る良一。美香は食器を洗ってい

る。ちなみに秋山家では食事時のテレビは厳禁。だから結構見たい番組を見逃す（主に七時頃の）。今日は早めに食事が終わったのでドラマの 後半は見る事ができた。

食後のあらかた見たい番組が終わり、風呂に入る。良一は鼻歌でも歌うわけではなく、無言で何か考え込むようにうつむいたまま。裸の自分が酷く虚弱に思える。逃げ場の無い、浴室の空間が監獄の檻に思えてきて、時折背筋が凍てつくのを感じる。良一は浴室で一人、不安であった。

風呂から出て、便所で大きい用を足す。風呂上りの習慣、台所に行つて緑茶を一杯入れる。いつもはそつなく過ごされる日常。しかし、「パシャ……」と緑茶が床にこぼれる。この日はいつもにも増して調子が悪い。良一の手は振るえ、まともに湯飲みを持つこともままならない有様……。

あわてて雑巾で拭く。拭き終えてもう一杯入れなおすが、自分の不調に呆然とせざるを得ない。意識が遠ざかつていくような絶望感。原因不明で理解不能な寒気が再び良一の身を襲った。

「どうしたの？ なんか元気ないわね」

風呂上りの美香が良一を気遣った。

「いや、別に……。なんでもないよ」

そう言つて良一は自分の部屋に入つていった。「おやすみ」の一言もないその態度に、美香は少し拍子抜けした。

相談してどうにかなるものでもないだろう、と良一は考える。むしろ相談しようが無いことが現実。何せ原因も症状も当の本人が把握できていないのだから。

部屋に入った時、強い悪寒を感じた。とりあえず周囲を見渡すが、不安の原因は見えてこない。

電気を消して急いで布団に入り、ぎゅっと目をつぶる。もう、や

めてくれ。聞きたくない！消えてくれ！

頭が痛む。心拍が速まり、鼓動が頭蓋に響いてくる。気がどうに
かなっちまいそうだ！これ以上は正気でいられないよ！！

掛け布団を頭からかぶる。精一杯締め付けて、耳をどうにか塞ご
うとする。耳栓でも買っておけばよかったか？不安の高まりを抑え
きれない。

しばらく堪えていると、うめき声に膜がかかった。やがて声
は聞こえない程に小さくなっていく。

落ち着いた。ウソのように不安が消えた。

耳を澄まして何も音が無い。足音やテレビの音さえも……。姉
さんはもう寝たのかな。このまま朝に

「ア……ス……」

「！」

一瞬、呼吸を忘れた。心臓の鼓動が再び脳に響いてくる。

「オ……オオ……アア……口……ズ……」

感じる、わかる。掛け布団越しにいる。

全身に鳥肌が立ち、震えがとまらない。呼吸が苦しい！こんなこ
とは初めてだ。

近くに、真後ろにあれがいる。

恐怖が、不安が俺の部屋に入ってきた

うん

第二話

この赤い世界で……

r . 2

あれが俺の部屋にいる！

恐怖のあまり目をつむった。今までよりさらにきつく、目じりが痛むほどに。

この感覚には覚えがある。今、目を開けたらだめだ。今開けたら確実にあの世界が、赤色の世界が見えてしまう！

真っ赤な世界に幾つもの黒い線、直線が多い。それが何を意味しているのかは解らない。

小便漏らすほどの恐怖とともに、息苦しくなるほどの殺気を感じた。思えばそこから全てが始まっていた気がする。深層に刻まれた幼少の記憶。何故だかそれが鮮明に蘇ってくる

目をつむった、恐さに負けて。でも、お母さんのことが心配になって僕は恐る恐る目を開けた。

そこにはさっきまでの暗がりの部屋と、横たわって苦しむお母さんの姿は無い。真っ赤な世界、そこにある何本かの黒い直線と横たわった人の形の黒い線。

人の形の黒い線がお母さんだということはさっきの景色から解った。でも、その横にある黒い塊は何？　こんなもの、さっきは無かった。その黒い奴の周りは火のように揺らめいていて、二本出ている手のようなものはお母さんの首の辺りに伸びている。

僕は怖くて、怖くて。ぎゅっと目を閉る。真っ暗な世界に逃げる

んだ。あつたかい夜なのに、がたがたと体の震えと寒気が止まらない。

突然、気配が去った。ここからすごい速さで遠ざかって行くのが解る。

“……良……”

苦しそうなお母さんの声が聞こえる。赤い世界が見えた途端に聞こえなくなってしまうていたお母さんの声が聞こえた。僕のぎゅつと握られた両方の手が汗で湿っている。

僕は少しずつ、怯えながらも目を開いた。涙で見えにくいけど、さっきとは違う姿のお母さんが見える。毎日見ている普通の世界のお母さんだ。でも、いつもと大きく違うところがある。お母さんはとても苦しそうで、お腹からたくさん血が出ている。

怖い、怖いよ！ さっきのは何？お母さん、死んじゃうの！？ いやだ、死なないでよ。死んじゃ嫌だよ！

……その時は、恐怖で何がなんだか解らなくなっていた。母さんが何か言っていたけど、思い出せない。ただ、怖くて発狂しそうで話を聞く余裕なんてなかった。今だって小便は漏らしていないけど、どうしようも無く恐怖している。

今、布団越しに背後に立っているのが何なのかは解らないが、俺の命を脅かす者だということは解る。

目は開けられない！心臓の鼓動が異常なほど早く、動悸も激しい。そしてあからさまに高ぶっている感情、あの時と同じような身体の変化。今目を開けるとまちがいなく真紅の世界に、黒い奴と同じベクトルの世界に行ってしまう。

嫌だ、怖い！どっかいてくれ！たのむ、殺さないでくれ！

「オア……お……ん……ア」

後ろにいるそいつは突如動き始めた。

「……口……ス……」

そいつの声が急に小さくなり、感覚がぼやける。どうやら、この

部屋から出て行ったらしい。詰まっていた息を吐き出す。どうやら俺は目当てではなかったようだ。ただ通りかかっただけ。

やつは壁の向こうに……ちょっと待てよ。あいつ、壁の向こうに行つたのか？ たぶんそうだ。感覚的にだいたいどの方向にいるかわかるし、気配に膜がかかっている。

「あいつ、なんか言つてたな……」

よく思い出してみると、やつのうめき声は言葉になっていた。「クロス」と、たぶん「オンナ」と言っていた気がする。オンナ？…

……！！……壁の向こう！？隣の部屋！？

ね、姉さん……か！？

今度は強烈な不安を感じる。最近感じていた不安の根源が今、俺の脳髓を締め付ける。これだったのか、ずっと感じていた嫌な予感。このことを暗示していたのか！？

「姉さんが……殺される」

俺は声にならない声で不安の確信を叫んだ。閉じたまぶたが痙攣している。布団の中で昔味わったことのある恐怖と不安の再来に怯え、震える。俺は閉じたまぶたをさらに両手で覆った。

「目を開けなければ……！」

目を開けなければ、赤い世界に行かなければ姉さんを助けられない。目を開けなければ何もできない……解っているのに暗闇の世界から出ることができない。怖い怖い怖い、その単純な単語が俺の意識の中を駆け巡っている。

赤い世界を見たくないんだ。自分が自分でなくなってしまうような不安感と、黒い奴の強烈な殺気にさらされてしまうから。どうして家にくるんだよ、何で姉さんなんだよ！

……だいたい、目を開けたところで、あの黒い影のような奴に挑んだところで俺に何ができる？ それに姉さんが殺されると決まっていたわけじゃない。

さっきのうめき声だつてきつと聞き間違ひさ。きちんとは聞き取れなかったし。明日の朝もまた、何事も無かつたように姉さんは俺

に柔道技をかけてくるに違いないんだ。いつもと同じ朝が……俺は……俺は、馬鹿か!!? 逃げるのかよ、あの時と同じに!

目の前で苦しむ母親がいるっていうのに何もなかった。何かできたのに! 効くか効かないかは別として、立ち向かっていくべきだった! 拳を一発やつにぶちかましていれば、それが運よく急所に当たっていたかもしれない! そうすれば、そうすれば母さんは……。

そんな都合よくいくとは思えない。けど、可能性があるだけ何もしないより百万倍もましだ!!

「目を開けるんだ、目を開けるんだ!」

布団の中で自分に言い聞かせる。もう嫌だ。大切な人が死ぬのはもう嫌だ! 姉さんは、毎朝本気で俺を絞め落とそうとしてくるし、喧嘩になると場所を問わず俺を投げ飛ばす。

けど、毎日俺の健康を気遣ってくれるし、俺がインフルエンザで49度の熱を出したとき、仕事を休んでまで俺の看病をしてくれた。守るんだ、今度こそ守るんだ。大切な人を守るんだ!

そんな俺の熱い想いに、体は反応してくれない。今まで以上に震えちまう。

「早く、早くしないと……!」

守りたいという想いを恐怖の感情が凌駕している。自分のビビりっぷりにあきれる。俺は、こんなにも情けないのか。なんて弱い男なんだ……。

自分の弱さに絶望したとき、頭の中に懐かしい言葉が響いた。

“良一、怯えないで”

母さんの言葉だ。ずっと思い出せなかったのに。

“よく……聞くのよ、良一……”

母さんの声、苦しそうだ。なんでこんなことに……。

“良一、あなたがこの赤い世界を恐れるのは仕方のないこと。この禍々しい世界を見れば、誰だって恐怖し、怯えてしまうわ。……でも良一、これだけは覚えておいて。あなたには力があるの、この赤

い世界で戦うことができる力が。あなたが勇気を出して立ち向かえば、怖いものなんて何もないわ。

だからもしこれから先、赤い世界の住人があなたやあなたの大切な人に牙を向くようなことがあるのなら……戦いなさい。黒い住人たちに對抗できるのは、あなたしかいないのだから。逃げたり、誰かの助けを待たないで……勇気をもって立ち向かいなさい。あなたならできるから……お母さんを信じて……良一、勇気を……良……

母さんの声はしだいにかすれて、聞こえなくなっていました。

「母さん……お母さん……！」

また、同じ過ちを繰り返してしまうところだった。また、逃げようとしていた。勇気を出せ、俺はもう昔の俺じゃないんだ！母さんだって言っていたじゃないか！勇気を出せば、あいつらに対抗できるって……。母さんを信じる、目を……開けえっ……！

「……………！！」

俺は真つ暗闇の世界から飛び出した。そこには見えるはずの、暗がりに沈んでいる白の敷布団はない。純粹な赤の世界。鮮やかな、あまりにも鮮やか過ぎる赤の世界があるだけだ。

生臭い臭いも、うめき声も錆びた鉄のような味も、いつもより強く感じる。そして肌に突き刺さるような壮絶な殺気。

一瞬、恐怖が顔を覗かせる。しかしすぐに意志を固める。

「もう、逃げない……」

姉さんの部屋は今の俺から見て右側にある。あたり一面の赤の中に黒い直線が見える。それらは何かをかたどっているように見えた。壁はないのか？右を見た俺の目には、おそらく姉さんと思われる人型の黒い線が長方形の黒い線の上に乗っているのが見える。あれは……ベッドか。そして俺の視線はそいつに釘付けになる。

姉さんの横にたたずむ黒く、揺らめく影のような物体。

俺の全身を、痛いほどの寒気が襲う

つづく

第三話（前書き）

・・・ええと、連続投稿申し訳ない。

実質、2 + 3で一話って感じなので、キョウキョ上げておきました。

お許しを。。

第三話

この赤い世界で……

r . 3

寒気…恐怖が俺を襲う。だが、俺の体はもう震えちゃいない。

「姉さん！ 起きろ、姉さん！」

俺は叫んだ。精一杯、腹の底からの大声で。しかし、姉さんに反応はない。

「姉さん！ 起きて、逃げろ！ 殺されちまうぞ！」

……だめだ、姉さんに反応はまったく見られない。聞こえないのか？ そういえば母さんの声はこの世界では聞こえなかった。いつもの世界と、この真紅の世界は別物なのか？

そんな憶測を巡らす。俺の声に反応したのか、黒い奴はこっちにその真紅の瞳を向けた。が、すぐに視線を姉さんに向けなおした。

「……女。……裏切り…殺ス」

黒い奴の声が聞こえる。さっきまでは聞き取りづらかったうめき声が、今はかなり聞き取りやすくなった。これもこの赤い世界のせいなのか？

俺はいろいろと考えすぎて少し混乱中だ。ハッとわれに返る。視界に飛び込んできたのは黒い奴が腕のようなものを振りかぶっている緊迫の情景。何だ？ 何をする気だ。

おい、まさか。やつぱりそうなんだな？ 殺る気なんだな？ おい、ちよっと待て。おまえ………

「やめろおお！」

恐怖や不安感は吹き飛んで頭ん中はスカツと空になっている。視界には黒い奴しか映っていない。今の俺はあの時とは違う！ 飛び掛る、拳が黒い奴にヒットしたのが解った。同時に腹に何かが、おそらく奴の拳がぶち込まれた。腹筋の真ん中の辺りに痛みが走る。

気づくと俺の体は吹き飛んでいた。何かに当たって止まる。俺は驚愕し、思ったことが思わず口をついた。

「……うそだろ？」

パンチが全然奴に効いてないことや、殴り飛ばされたことに驚いているんじゃない。やつに俺の拳が当たったとき見えた俺の拳と腕黒かった……あの黒い奴と同じように。

「まさか、そんな……」

確かめる。思い切って下を向く。緊張で息が荒くなる。見えたのは、黒い腕と手のひら。胸部も腹も下半身まで、すべてが黒く染まっている。

「ひ……いい……！」

揺らめいている黒い影のようなもの。これが、俺の体！？

「あ、あいつと同じ？」

そう、俺の体は今まさに、目の前に迫ってきているあの黒い奴と同じ状態になっている。この黒い体は近くで見るとなんだか蠢いているようにも、脈をうっているようにも見えるがそんなコトはどうでもいい。

何でこうなっただ？ 人間はこの世界では人型の黒い線になるんじゃないのか！？ この体を見ているいと疑問や感想が沸き出てくるが、俺を今もつとも考え込ませる疑問。それは、人間の俺がこうなっているということは奴も人間なのか？ ということだ。さ

らにそう考えると逆のことも考えられる。もしかして……俺が人間じゃないのか？

「オオオオ……邪魔……邪魔ああ……！」

叫び声とともに黒い奴は俺を殴り飛ばした。

「ぐっぶ……っが！ い、いてえ……！」

やばい、やばい！ 今の状況にそんなことを考えている余裕はない。とにかく奴を何とかしなければならぬ。顔を一撃されたため、意識が一瞬吹っ飛んだ。それとともに余計な考えも脳裏から消えた。

「うおおお……！」

もう一度殴りかかる。もはや我武者羅だ！ 奴の顔面めがけて拳をぶち込む！ 捉えた、またあの感触がした。人もそう殴ったことのない俺だが、この感触は明らかに人のものではないと解る。

攻撃の効果がまったくないわけではない。少し俺の拳が奴の顔面にめり込んでいる。しかし、奴は吹っ飛んだりよろけたりはしない。今度は左のわき腹に奴の拳がめり込む。俺はその場に崩れ落ちた。

「か……がはあ……！ あばら……が」

わき腹が痛い。折れてはいないと思うが、あばらがギンギンと痛む。奴に俺のパンチが効かない理由、それは単純に俺の筋力より奴の体の頑丈さのほうが圧倒的に勝っているからだろ。つまり、奴のほうが強いってこと。

「だ、だめだ……全然かなわない……」

黒い奴が俺を見下ろす。

「や、殺られる……」

しかし、黒い奴は無視するように俺に背を向けた。

「……ナンデ……カナ……チャン……」

そう言つと、黒い奴は姉さんに近づいていく。体が痛む、思うように動かない。くそう、やっぱりだめなのか？ 勇気を出して立ち向かったところで、俺はこのザマなのか？

ちくしょう、ちくしょう！ 守るんだ、今度こそ守るんだ。当たり前のようにいるけど、その当たり前の人が死んだとき、もう会えないと解ったとき、その人が自分にとってどんなに大切な存在だったのか解る。

俺は経験したことがあるから知っている。その、当たり前にいるはずの人がいないということが、どんなに悲しくて寂しくて、つらいことなのか。今、動かなければ……！

「まてよ……まてよ、そのくそ野郎……！」

俺はよろけながらも何とか立ち上がって、精一杯叫んだ。なんでもいい、とにかく奴を止めたかった。

反応があった、黒い奴はこっちを向く。怒ったか？ 来いよ、とにかくどんな手を使ってでもお前を止めてやる！

「……加奈ちゃん……ナンデ？ナンデ、オイテツタ？ナンデ……？何デ……僕ヲ……僕ヲオオオオオオ……！！……？」

黒い奴は突然発狂し、赤い眼をむき出す。黒色の顔の下部が裂けて真紅の口が現れ、さっきまでとは比べ物にならないほどの殺気を放つ。そして奴はその狂気の瞳を姉さんに向けた。

俺じゃなくて、あくまでも姉さんが狙いなのか！ さっきまでは槍の先端のようだった奴の手先が三本に別れて鎌爪のような形に変わる。そいつで姉さんを串刺しにするのか！？ ふざけるな、お前みたいなわけも解らない化け物に姉さんを殺されてたまるか！

「させるかあああ……！！」

全身の痛みがうそのように消え、俺は奴に突進する。漆黒の顔面の中にある二つの赤眼が俺を直視する。無意識のうちに俺の手の形は、拳ではなく手刀の形になっていた。

腕が、腕が熱い！ 何がどうなったのかはよく解らない。とにかく

く俺は奴の黒い体めがけて腕を振りぬいた。

不思議な感触。大量の豆腐に腕を全部突っ込むような感触。奴の足が見える。そして、一面の赤。生ごみのゴミ袋に顔を突っ込んでいるような強烈な腐敗臭が俺の鼻に襲いかかる。

「うぐ！」

あまりの臭いに吐き気がする。上を見上げると、奴の体が……

「さ、裂けてる……？」

なんだ？ どうした？ なんでこいつ、真っ二つに裂けている！？
「オオ……」

体が裂けてしまった黒い奴は、何か断末魔のようなうめき声を上げながら崩れていく。やがて、そいつは完全に消えてしまった。

だいぶ不可解だが、どうやら倒せた……らしい。

「た……倒したのか？ どうなったんだ！？ 何で真っ二つに？ ……」

俺が、俺のチョップなのか？ 俺がやったのか？ し、知らなかった。

俺のチョップって……すげえ……強……」

突然に意識が薄れていく。強い疲労感に襲われ、赤い世界にまぶたのシャッターを下ろす。俺はその場で眠りについてしまった

つづく

第三話（後書き）

．．．．．
うづく！ー！！

第四話 / 青き苦悩（前書き）

ここを開いていただき、誠にありがとうございます。

第四話です。 ですが、じっしつ1〜3話で「第一節」なので、これが「第二節」のプロローグ的なものです。

では、どうぞ

第四話 / 青き苦悩

この赤い世界で……

空は清々しく晴れ渡り、日光浴したくなるほどの日差しが南条市の町を照らす。市民達が起床し始める静かな時間帯に、柴田荘を揺るがす怒号がこだました。

「何してんだてめーはああ！」

外界の絶好調な日差しを方角的にシカトしている暗がりの部屋で、秋山美香は怒りの雄たけびを上げた。

「いぎやああ！折れる、ほんとに折れるよ姉さん！」

秋山良一は姉の美香の部屋で、左腕に走る激痛にもがいている。秋山家では美香の部屋への侵入禁止は暗黙の掟とされている。良一はこのことをよく理解していたし、今までこの掟を破ったことはない。しかし、今朝の良一は美香の部屋で熟睡していた。

無断で部屋に入ったことも重罪だが、その上なぜか熟睡している。これはもう、殺してくれと言っているようなものである。

当然、寝起きに機嫌が異常に悪くなるという習性をもつ美香はこの弟の姿を発見するや否や、問答無用に左腕をへし折りにかかった。「何で私の部屋に入ってるのよ！そしてなぜに熟睡してやがるのよあんたは！？」

「いや、ちよつと説明しづらい理由が……いただだ！」

美香は両腕を決めにかかった。

「理由！？何か？僕は寝相が悪いとかそんなんか？それとも一人で寝るのは寂しいってか！？この軟弱ブラザーがあー！」

美香は両腕どころか両足、さらには首も同時に締め上げた。何だこれ？柔道技なのか何なのかは解らないが、迫力満点！空前絶後

の必殺の絞め技が良一に炸裂している。

「ぎゃああああああ……！！」

前代未聞の痛みによって良一の意識が刈り取られた時、それは地上最強の関節技、“美香・ジャッジメントムーン（技をかけた姿が三日月のようになっていているため）”誕生の瞬間となった。

今日は左腕をさすりながら家を出た良一。

「よかった……折れてなくて」

命どころか左腕も無事というまさに地獄に仏的な幸運に、良一はホツと胸をなでおろした。

「まさか姉さんの部屋で爆睡しているとは……命が助かってよかった。でも、ていうことは……」

良一は痛む左腕を眺めながら、昨晚のことを思い出していた。

「夢だなんて思えない。昨日のことは現実だった……。でも、ちょっと信じられないな」

ぼやけたイメージではあるけど、昨晚のあまりにリアリティのある出来事と今朝自分が姉さんの部屋にいたという事実。これを見ると昨晚のことを夢だと疑う気にはとてもなれない。でも、納得のいかない点がある。全身のダメージがすっかり抜けているということだ。

疲労感や今朝の美香によるダメージはあるが、わき腹や顔面の痛みがまったく無い。体が吹っ飛ぶほどの衝撃、確実に幻想なんかではなかった痛み。あのダメージは一晩で消えるようなものではない。さらに疑問もかなりある。まず、あの黒い奴は何なのか？ 昨日の黒い塊は昔良一が見た奴とは異なる姿をしていた。いったい、何体この世に存在しているのか？

それに良一も奴らと同じような体質になっていたが、どっちなのか。奴らが普段は人間の姿をしているのか？ だとしたら良一は人

を殺してしまったことになる。それとも、実は良一が人間ではないのか？ もしくは赤い世界が見えるときだけ人間ではなくなってしまうのか？

様々な疑問に考え込む良一だが、いくら考えても疑問が解決することはない。真実を知るにはあの赤い世界にもっと深く関わるしかないが、昨晚だっていつ殺されてもおかしくないような状況がいくつもあつた。わざわざ自分から危険な状況に向かっていくのもちょっと……。

疑問に疑問が重なっていく思考のジレンマに、朝っぱらから良一は疲弊してしまった。

「あゝ、だめだ。考えたって何もわからん。でも、何もしないわけにもいかないような気が……だめだ。やっぱ昨日の疲れが残ってる。考えるのがめんどくせえ。はあ……また寝不足かよお、まいったなあ……」

大きなため息をついてうなだれる、悩み多き青春青年。これ以上問題が起きませんようにと祈り、不況の時代にあえぐ中間管理職のおっさんのごとく、背中に深みのある哀愁を漂わせる。

「おはよう、アッキー」

疲労感に覆われた狭い背中に、明るく清々しい少女の声が響き渡る。声の主は良一の幼馴染である小林弥生。こはやしやよい良一を「アッキー」と呼ぶのはこの少女だけであり、そこがまた二人の幼馴染感をほがらかにかもし出している。弥生は才色兼備の女性で進学校の「星間高校」に通っている。

女優やアイドルというより、小学校低学年の担任といったかんじの和やかな印象を与える外見、雰囲気。清楚で少し大人びた落ち着いたきをまとうていて、第一印象に「やさしそう」と感じさせる。性格はおっとりしているが、割と積極的な面もある。趣味は料理と裁縫、愛犬との散歩。とっても家庭的だ。

「お、おう。おはよう、弥生。どうした？　いつもよりちょっと登校遅いんじゃない？」

ふりかえる良一の顔に明かりがさす。

「え？　ああ、目覚まし時計かけ忘れて、寝坊しちゃったの。ちょっと遅刻かも……」

弥生は息を切らしている。遅刻をまのがれるためか良一に追いつくためのなのか、結構走ってきたらしい。

「……アッキー、何か悩み事でもあるの？」

良一の顔をのぞきこみながら話しかける弥生。

「え……！？　ナ、何でそうだと？」

少しほほを赤らめる青年。

「だって、なんか顔色悪いよ？　寝不足？」

良一を気遣う弥生。それにしても良一は、体調の状態や心境が極端に表情に出やすい体質らしい。こういう男はポーカーが苦手な場合が多い。結婚して浮気なんかしたら、一発でアウトだろう。

「あつとお……ちょっと疲れが残っててさ。ていうか、そう言うおまえも顔色悪いぞ。どした？」

「え、そう？」

一見なんともないようだが、幼馴染の良一だからこそ解る、何かいつもと違うかげりを感じ取ったのであろう。

「何かあったのか？」

今度は良一が心配する。

「うーん、何かあったわけじゃないんだけど……。最近、よく眠れなくて。夜中に何回も起きちゃうの。神経質になってるのかなんというか」

少しうつむく弥生。

「寝る前に怖い映画とか見たりしたんじゃないの？　ほら、おまえって昔から幽霊とかだめじゃん」

「心当たりはないけど……。でも、なんだか最近何かに見られている気がするの」

それを聞いて良一は驚愕の表情を浮かべる。

「み、み、見られてる！？ストーカーってことか！！？」

思わず声を荒くして驚きの声を上げる。

「ちがうの、そういうのじゃなくて……。何か、人じゃないものがある感じがするの」

それを聞いて「フッ」と息を短く吐く良一。

「ははあ……。そおいうこと。幽霊がいる気がするってことね」

安心したようなどつと疲れたような表情になる良一。

「なによお、私はほんとに怖がってるんだから。……。でも、ちょっと懐かしい感じもするのよね」

“カンカンカンカン……” 二人は踏み切り前の降りた遮断機の前で止まる。

「そついえばあったなあ、何年前だっけ？おまえ、学校にお化けがいるとか言って一週間くらい学校休んだことあっただろ。たしかあれ、天井にあったシミが顔に見えてただけだったんだよね？ またこれありきたりな勘違いだったなあ、おい」

弥生をからかうように小学校時代の思い出話をきりだす。

「そんな昔のこと……。人が真剣に相談してるのに」

“グアトングアトン”と新京線の緑色の電車が、遮断機越しに二人の前を通り過ぎる。なんとなくよそよそしい感じがする良一の態度を感じとったのか、寂しげな弥生。うつむいた弥生の顔に電車の慌ただしい影がかかる。下唇をかんだ寂しげなその横顔は、弥生の心にある不安感を忠実に表しているようだ。

電車が通り過ぎて遮断機が上がり、二人は踏切を渡る。踏切を越えると正面に時計屋（小山時計店）がある。その前には丁字路がある。良一はここを左に弥生は右にまがる。

「じゃあ私、ここ右だから。」

少しムスツとしながら話す弥生。

「おう。まあ、元気出せよな。きつとあれだよ、新学期になったばっかでちよつと気づかれしてるだけだよ。すぐになんともなくなるさ。心配しなさんな」

良一の弥生に対するなぐさめの言葉。

「……うん。ありがと、アッキー」

少し微笑んで答える弥生。

「じゃね、アッキー！」

弥生が後姿を見せ、歩き始める。

「おう、またな」

良一も反対方向に歩きだす。ふと、さっき見た弥生の横顔を思い出す。気になつて振り返る良一。見えるのは弥生の後姿と……と！？

「え……？　なんだあれ」

振り向いた良一の視界には、毎日見ている見慣れた通学路の景色と幼稚園のころから見てきた弥生の後姿。そしてそのやや後ろにあるのは……宙に浮かぶ謎の青白い玉。

「ひとだま……ってやつか？　そんなばかな！」

ジッと目を凝らしてみても、やっぱり青白く揺らめく球体にしか見えない。なんだかよく解からないがとにかく……

「おい、弥生！」

良一は弥生を呼び止めた。

「？　なーに、アッキー」

弥生は振り返って良一を見る。弥生と良一の対角線上には青白い玉がある。

「いや、それ……いったい……？」

青白い玉を指差す良一。

「なに？　なにかあるの？」

不思議そうに良一に問い返す弥生。

「だから、そのひ、ひとだま？　みたいなやつ。」

「ひとだま？ ……！ そんなことくらいじゃ怖がらないわよ」

どうやら弥生には青白い玉は見えていないらしい。

「いやいや、うそじゃなくて。 え？ほんとに見えてないの？」

「んもう！しつこいなあ。 人魂なんて言わないでよ。 さつきは心配ないって言ってたくせに」

良一には非常にくつきり見えるので、当然弥生にも見えると思っただがなぜか見えるのは良一だけらしい…… などと思っていたらすうっと虚空に溶け込むように消える人魂。 いつのまにか完全に見えなくなってしまった。

“ゴーンゴーンゴーン……” 小山時計店から時刻を知らせる大時計のベル音が鳴り響いた。 この時計は毎日朝の7、8、9時に鳴り、時刻を知らせている。 近隣の家からは「朝っぱらからうるさい」という苦情が出ているが、通学や通勤途中のサラリーマンや学生からは「稀に助かる」と評判である。

「あ！ ヤバイ、ほんとに遅刻しちゃう。 じゃあね、アツキー！」

「あ……お、おい」

弥生は良一に手を振ると、背を向けて駆けていった。 弥生の背中がどんどん小さくなる。 良一は遠ざかる弥生の後姿に、心の中を冷たい風が通り過ぎるような寂しさを感じた

つづく

第四話 / 青き苦悩（後書き）

読んでいただけたこと、心から感謝いたします。

それでは、また次回！

第五話 / ガメラ友（前書き）

ああ、朝だ……おお、朝か……

眠いですね。

第五話 / カメラ友

この赤い世界で……

r . 5

とぼとぼと考え込みながら通学路を歩く良一。校門を通ると寺西（寺地西高校の略称）自慢の大桜が彼を出迎える。

古い校舎の暗くて汚らしい生徒玄関。授業はもう始まっているので、人の姿は他に見当たらない。

2202番の下駄箱。その小さい鉄製の扉を開く。うち履きに履き替えて“カシャン……”と小扉を閉めた。扉を閉めた手が暗い玄関の影に覆われる。不意に昨晚のことが思い出される。

「なんだっただろう、あれは。またあんなのが家に来るのか？」良一の心の中を「よくわからない、どうしたら良いのかわからない」というモヤモヤが覆う。明日日テストがあつて、今日からはじめようか？それとも今日遊んで明日徹夜するか？と悩む学生の心境に近いものがある。

暫く塞ぎこんでいると、今朝の弥生のことが浮んできた。

「今日の弥生、本気で悩んでる感じだった……。もつとちゃんと話を聞いてあげればよかったかな」

弥生のことを考えると胸の奥がじんわりと熱くなる。同じ学校だったら毎日会えるのに。中学の頃が懐かしく思い出される。良一はタメ息を一つ吐いた。

「やっぱり心配だな、あの人魂。あいつの母親とかは気づかなかつたのか……。俺だけに見える？ それって、何か似ている気がする。

あの赤い世界に　　」

そう思ったとき、胸の奥の熱さが引いた。まさか、人魂はあの赤い世界と何か関係があるものなのか。しかし良一は今まであんなものを見たことがない。大体今は午前中。午前中にあの世界のことを感じることはない。少なくとも今までは……。

しかしまた一つ、良一に悩みが増えた。何かしたほうが良いのか？ どうすればいい？

脳回路は良一の勝手な考察によって大渋滞の様相をきたしている。「あれえー！？ 暗い、暗いなあ！　どしたよ良一い、上腕二等筋に異常でもきたしたか？」

授業時間に入った静かな生徒玄関に、あほじゃない？　と思うほどでかい声を発しながら恭平が堂々と登校してきた。

「……なんだ、恭平か。相変わらずお前は　。なぜに筋肉なんだよ？」

さっきまでのしんみりとした雰囲気と恭平のテンションとのギャップに、良一は何だか拍子抜けしてしまった。

「なぜにつて。それは俺の父ちゃんがプロレス好きということを知つての狼藉か！？　だいたい、上腕二等筋って内臓の一種じゃないの？」

自分の言葉に責任をもてない。というか何も考えていないかのような言動。

「ていうか良一、今何時かわかる？　俺、今日携帯忘れちゃってさあ。時間がタイムイズ・マネーなんだよね」

なぜか仁王立ちで威風堂々と語る恭平。

「時間？　んーと……　8時20分だな」

この学校のショートホームは8時10分に始まる。よって、彼らは完全なる遅刻。しかし担任がそんなに厳しい人ではないのでとく

に問題にはならない。

「20分！！？ うそだろ、信じらんねえ……。遅刻じゃねえか俺たち！」

敵のボスが実の父親だった。そんなシーンを彷彿とさせる恭平のオーバリアクション。

「いや、まあそうだろ。でもそんなに焦んなくても良いんじゃない？ 俺らの担任、一馬だし」

良一が冷静に恭平の反応に対処していると、恭平は血相を変えて言い放つ。

「馬鹿野郎！ 朝っぱらから失態をするサラリーマンに、明日はねえんだ！」

タイムイズマネー、時は金なんだよ！ わずかなビジネスチャンスも無駄にせず、1円でも多く儲ける！それが真のビジネスライフつてものだ、そうだろう！？

俺たちリーマンに、安らぎの時間なんてねえんだよお！ 毎日が戦争なんだよおお！！」

熱いビジネス理論をぶつける恭平。ありつたけの熱意を語り終えると、恭平は教室に向けて全力で駆け出した。そのあまりに暑苦しい後姿に良一はなんとも言えぬ脱力感を覚え、心の中に生ぬるい風が吹き抜けるのを感じた。

12時40分。昼休みを告げるチャイムの音が放送のスピーカーから学校中に鳴り響く。

人が半分ほどになった教室で男二人、むさ苦しく弁当を食べる。

奈緒は吹奏楽部の友達

がいる別クラスに行った。

「おお？何だよ、肉じゃが残すのか！？」

口いっぱい飯を詰め込んだまま、恭平が豪快にしゃべる。汚い

シヨットガン。飯が俺の机に飛び散る。

「うわ！きつたねえなてめえ。飯飛ばすなっつていつも言ってるだろうが！ 拭けよてめー」

「おおつとう、すまんすまん」

いそいそとティッシュで机を拭く恭平。拭いたティッシュをゴミ箱へスリールポイントシュート！……かすりもしない。

「やる前から外れるつて解かっていることをするなよ……ああ、肉じやが？ 俺、ニンジン嫌いだからさ。だから残す」

基本的に俺は好き嫌いが少ないほうなのだが、どうしてもニンジンだけは許すことができない。微妙な甘味と土臭さがとっても嫌いだ。こんなもの、馬にでも食われてりや良いんだ。

「ばっかおめえ、男ならオールオアナツシングでオールオツケイだろうが。野菜王国日本の国民として、誇りと尊厳を持て！」

野菜王国日本？ほとんど国外からの輸入に頼ってるじゃねえか。

「嫌いなんだからしょうがねえだろ。だいたい、そんなこだわるポイントじゃねえだろが」

「いいや、こだわるね。すごく重要なポイントだね。なぜなら俺が思うにその肉じやがは、美香さんの手作りだと思われるから」

……ああ、そういうことか。そのことで突っかかってきてるのね。

「ああ、まあそうだよ。姉さんの作だよ、これ」

実際姉さんの料理のレシピはかなり幅が広く、肉じやがのような家庭的なものも作るし、フランス料理もちよいかじっている。一度、うどんの麺をこねているのも見たことがある。

「そら見たことか！ まったく、油断もすきもあつたものじゃない。そうだと思っただんだよな。ま、別にそうだからってどうというわけも……あるんだけどね。なんていうかなあ」

なんだか口ごもりながら話す恭平。少し黙ってから飯をがつつく。

「早い話が、肉じやがくれつてことだろ？ いいよ。やるよ」

「ほ！？ いいやつたあ！ふおっほーい！」

またやりやがった！ 恭平のシヨットガンによって机の上が再び

お米フェスティバルに。

こいつ、ほとんど飯食えてねえんじゃないか？ またいそいと机を拭く恭平。拭き終えて肉じゃがに手を出す。

「うまい！うまいなあ、これ。古今東西探してもこの味を超えるものは無いよ！ ユーラシア大陸完敗！！さすが美香さん、究極のパティシエ！」

パティシエ？それはケーキとかデザートとかを作るやつだろ？

その後、美味しい美味いを繰り返し、よく解からない褒め言葉を連発した恭平。その表情はご満悦感で満ち溢れている。

飯を食い終えた俺らは食堂前にある自販機にジュースを買いに行った。

「あ、先輩。こんちわっす！」

途中、すれちがう野球部員の新生たちが先輩である恭平に挨拶をする。恭平は中学の頃から野球をやっていてポジションはセカンド。エラーが多いのが難点だが、そのバッティングは「寺西のガラ」とよばれ、他校野球部から恐れられているほどの腕前だ。「ゴラ」ではなくて「ガラ」というところがミソで、一度彼のバッティングを見てみると理由がわかる。

「やあ、若人諸君！おはよう、そしてこんにちわ！ 今日も力いっぱいブルジョアだな！」

後輩の前でかっこつけようと、自分なりにカッコいいセリフで答える恭平。だが、実際全然カッコよくない。無駄に貴族風なだけだ。後輩たちからは「かっこよくて尊敬できる先輩」ではなく、「アホっぽくて変な先輩」と思われている。まあ、それも自然の成り行きか。

食堂の右斜め前に自販機が二つ並んでいる。もう1時15分を越

えているので、この辺にはあまり人はいない。俺はコーヒーを選ぶ。無論、ブラックだ。

ところでこの自販機は紙コップ式なのだが俺はこのシステムが正直あまり好きではない。なんか段階ごとにやっていく様がとってもじれったく思うからだ。隣には紙パック式のやつもあるのだが、それは牛乳系かフルーツものしかなく、コーヒーが無いからだめだ。とはいっても、ちゃんと出来上がってくれば何の問題も無いのでそんなに困ったことではないのだが。

俺のコーヒーが出来上がる。次に恭平が百円を入れて飲み物を選ぶ。恭平も、いつも飲むものが決まっている。メロンソーダとコーヒーの混合ドリンク。

この紙コップのやつは飲み物を二種類混ぜることができ、意外とうまい組み合わせもある。が、恭平。お前は間違っている。あんまりつまそうに飲むので一度飲ませてもらったことがあるが、絶対間違っている。飲めば飲むほど元気が無くなっていく、これはそんな逆栄養剤的な飲み物だ。

もしかしたら恭平は、この呪われたドリンクを飲むたびに思考回路のネジがぶっ飛んでいるのかもしれない。だって恭平ったら、最近どんどんアホになってきているんだもの。

このままだと社会に適応できなくなるのではないか？ などということを考えている俺の横で、恭平は昨日起きたという「甘口カレー爆発事件」なるものの概要を、懸命に話している。

教室に戻る途中、便所に寄る。この西塔の中央階段下にある男子便所は、校内で一番の汚さと臭さを誇る。できれば入りたくないのだが、恭平が「この学校の校門ではなく、俺のそれがブレイクしまうよ」としつこく耳元でささやくので、仕方なくこの便所に駆け込んだ。一応、用を足す俺。

「おい、まだ出ないのか？もつすぐ5限が始まっちゃうよ」
早くこのくっさい便所から出たいから、恭平を急かす。

「く……まだだ。俺の中に眠る潜在能力は、まだまだこんなもんじやねえ！」

こりゃ、まだまだ時間がかかるな。

「先、教室行ってるぞ」

「ま、まってくれ。俺はまだ死んじやいねえよ！ ビリー、もう少しだけチャンスを……」

みなまで聞かず便所を出た。

教室に向かう途中の渡り廊下に、誰かが食べ歩いたときにこぼしたでだろうパンくずが落ちている。そのパンくずを、2羽のスズメがつつついている。

何の気も無しに立ち止まった。昼下がりの日差しに包まれ、春の心地良い風が体の左側から右側に滑らかに抜けていく。空間全体が外界と隔離されてしまった、そんな不思議な平穏。なんだかこういうのって、良い感じだ。

突然、2羽のスズメが飛び立った。それを合図にするかのように、平穏の空気は瞬間的に散ってゆく。同時に俺は我に戻る。突然、あまりにも突然にあの感覚が俺を襲う。

「ぐア……あ。こ、これは。近くに黒い奴が……！？ なぜ、こんな真昼間に……？」

頭を左手で抑え、そして振り向く。そこに立っているのは一人の少女……。

「はあ……ぐ……が？」

その少女の靴のラインの色は赤。ということは一年生か。背は低めで、結構かわいいな。

いや、そんなことより問題はこいつの胸の辺り。バストのサイズがどうとかではなく、青白い炎が時々見え隠れすることが問題だ。あれって、朝見た人魂の炎と同じ物……？

「何、見てるの。どこか変かしら、私？」

薄い笑いを浮かべて俺を見る少女。その瞳には、妖艶な光が満ちている。

「え？い、いや……」

言すべきか？ でも、俺以外に人魂が見えるやつなんているのか？ ていうかこの子には見えてない可能性のほうが高いんじゃないか？ だいたい初対面の人に人魂なんていって、変な人に思われたら嫌だしなあ……。

「見えているんでしょ？ 誰の指令かわからないけど、私には関わらないほうが良いわ。大体あなたは状況もよく解かってない……でしょ？」

なんかごちゃごちゃと意味の解からんことをいつてるなあ。ちょっとまでよ、“見えている”？ 何だ、それって人魂のことなのか？ こいつ、もしかしたら人魂のことを何か知っているのか。いや、ていうか、何者なんだよこいつは！！？

「お前、いったい何……」

「よお、待つててくれたのか？ いやー、さすが良ちゃん！ ビイ・ケアフルだね！」

緊張をぶち破るように、恭平の陽気な声が渡り廊下に響き渡った。その声に氣をとられて、俺は一瞬恭平のほうを向いた。再び少女の方を向く、しかし少女の姿はすでに無かった。

「消えた……？ 恭平。あそこにいた女の子はどっちに行った？」

「は？女の子？？」

な！……なんてこった。あいつはあいつ自身、普通は人間に見えないものなのか？それとも恭平に見られる前にどっかいったのか？ 恭平の動体視力が単に馬鹿なだけなのか？

（なんなんだくしょう！なんでこうもわけのわからんことが起くるんだよ！どうなっちまってんだこの世界は！！）

ガシガシと頭をかきながらイラつく。

「んん？ どうしたの秋山良一君？ イライラしちゃってからも

う。イライラには牛乳だよ、カルシウムだよ。ビューチホルなボーンをクリエイトしようよ！」

焼け石に水、イライラに恭平。恭平の腹に鉄拳を叩き込む。

「いたっ！なにすんじゃいいーい！」

「うっさい！人が悩んでるときにぐちぐちとやかましーんだよ！」

ギャーギャーと言い合う男二人。それから10分ほど竜虎のごとくにらみ合う。

結局、俺たちは5限に遅刻してしまった

つづく

第五話 / ガメラ友（後書き）

読んでいただき、誠に、誠に、ありがとうございます！

まだ続くんです。

第六話（前書き）

すみません、間が空きました。

でも投稿します。よろしければ是非、一読くださいませ。

第六話

この赤い世界で……

r . 6

学校帰りの通学路。良一の通学路は商店街や住宅街の中をひたすら歩き続けるというものだ。徒歩での通学は細かい時間を気にしないでいいし、金もかからないので気楽で良い。

夕方前の住宅街に漂うのどかな空気、時折聞こえる子供のはしゃぎ声。スーパールのビニール袋をかごに入れて自転車をこぐおばさんとすれ違う。細く、歩道が無い道でトラックとすれ違うときにはちよつとしたスリルを感じる。

一年通い続けたこの通学路は目をつぶってでも歩ける気がする。実際、今の良一は景色なんて見えちゃいない。昼間の女子のことや赤い世界のことなどで頭がいっぱいで、力いっぱい叫びたくなるほど悩んでいた。

時計屋前の踏切を越えると、残る道のりは全工程の3分の1くらいになる。踏切を渡ると、良一の脳裏に弥生の顔が浮かぶ。

「やっぱり気になるなあ。あれは見間違いだったのかな？ いや、でもあの女の子のこともあるし……」

良一はけっこうグチグチと考え込む性格で、スパッと割り切ったリ「まあ、いつか」などと楽天的に考えるのが苦手だ。しかし今の場合、あまりにも不思議なことが起こりすぎている。たとえ良一で

なくとも考え込んでしまつてあろう。

「弥生……。そういえば最近二人っきりで遊んでないな。中学のころだつて遊ぶときは誰かと一緒だつたし」

昔はよく二人っきりで遊んでいた。五歳のころ、小さいチャリンコ必死にこいで二人で海を目指した。結局海にもいけず迷子になつて警察のお世話に……。思い出される母の怒り顔。

中学まではずっと同じ学校で毎日のように学校で顔を合わせていた。小・中通してクラスはいつも一緒。今考えると結構奇跡的だつたように思われる。

しかし高校に入ってからはお互い（主に弥生）が忙しく、二人っきりで遊んでいない。というよりあまり関つていない。たまに通学中に会つたり、メールしたりするくらいになつてしまった。

中学時代の良一は、あまり弥生を女性として意識していなかった。気が合つて話しやすい仲の良い幼馴染、という印象で接していた。ところが高校になつてなかなか会わなくなると、だんだんと寂しさや物足りなさを感じるようになる。良一はそれらの感覚を始めるのうちは五月病か何かだと思つていた。

その後久しぶりに弥生に会つたとき、今まで感じたことのない不思議な感覚、胸の奥が熱くなるような視界がボーっとするような感覚を良一は感じた。そのとき良一は寂しさや物足りなさの原因が弥生だと気づき、自分の心を悟つてしまった。

それからしばらくの間は毎晩弥生のことしか考えられなくなり、いつもの赤い世界の感覚ですら弱まつたように感じるほど、青春の春風に熱が入っていた。そして日増しに会いたいと思う気持ちは増していった。

近所（徒歩五分）に住んでいるのだから会いに行けばいいんじゃない？と思うが、今まで弥生に抱いていた親近感が完全に恥ずかしさ、躊躇いにすり替わってしまい、会いにいけなくなってしまった。「会いたいけど恥ずかしくて会えない」そんな複雑な少年心のジレンマに、良一は日々悩まされる。

正直自分の急激な心の変化についていけない良一。「通学途中に偶然会えた」そんな自分をごまかすための偶然を演出するために、たまに少し早く家を出る。それが良一の持っている勇気の限界キャパシティ。

しかしいざ会ってもぎこちなさが雰囲気や表情に出てしまう。そのことに自分で感じている良一はさらに深く悩む。

目を細めて息を吐き出す。最近悩みと比例してタメ息も増えた。

「バウワン！ガウ、フガッフ！」

「うはあっ！」

上の空の良一に向かって近所に住む田中さん家の猛犬、「ベルメゾン」が吠え掛かった。完全に意表をつかれたので、思いつきりびって後退する良一。気前が良いほどのだらしない表情でベルメゾンを見つめる。

「す、すみません……」

何か知らないが謝ってしまった。気が動転している、逃げるように走る。ベルメゾンは憂鬱な逃亡者の後姿に向かって、わめき散らす狂人のようにほえ続けていた。

少し走るとだんだんと落ち着いてきた。たまに柵から顔を覗かせているアホ犬、俺は昔時からあの犬が苦手だ。ちなみに飼い主の田中じいさんは穏やかでとても良い人で、昔よくお菓子をくれたりした。ペットは飼い主に似るというが、どうにも信じられない。

走ったので、のどがちよつと渴いた。オーソンが見える。俺はオカ・コーラ社の新製品「百選」が飲みたくなった（百選：先週発売されたお茶で、百を超える種類のお茶の葉をブレンドしており、非常にくせが強く、臭い。大部分の人は「なんで製品化しちゃったの？」とコメントするお茶だ。しかし、俺はなぜかこのお茶を美味いと感じる。姉さんも舌が腐ってるのではないかと笑っていたが、うまいと思っちゃうんだからしょうがない）。

「引く」と書いてあるドアを押して店内に入る。

「いらつしやいませえ」

店員の挨拶。このコンビニはかなり愛想がよく、「いらつしやいませ」と「ありがとうございました」、それに感じのよい笑顔をしっかりとこなす。だから入りやすいし、ゆったりとできる。

店の奥の飲み物コーナー、でっかい冷蔵庫へと向かう。途中、漫画本の棚に目をやる。とくにめばしいものは無い、ここはスルーする。酒のコーナー……隣にコーヒー、栄養ドリンクのコーナー。その隣にお茶のコーナーがある。

ガラス張りのやや重い扉を開くと冷たい風がヒヤリと漂う。「百選」のペットボトルを取り出す。何気なく目をやったカツヤサイダー、おまけにお城フィギュアが付いている。

「アッキー！」

突然、顔を覗き込まれた。眼前に弥生の爽やかな笑顔が現れる。

「は？ ……や、弥生！？ なんでここにいる！？」

いきなりのことに慌てる。突然すぎて自分のいる現実世界を疑う。

「なによ、近所のコンビニにふらつと立ち寄っちゃ駄目なの？」

態度が不満だったのか、少しふくれ気味で言う弥生。

「い、いや。そんなことはないけどさ……。あれ？ 学校はもう終わったのか？ おまえんところは毎日7限だつて前に言つてなかったっけ？」

弥生の通う高校は進学校のため、校則やら何やらといろいろと厳しいらしい。しかもほぼ毎日7限（俺だつたらとつくに過労死しているだろうな）。

「金曜日だけ6限で終わりなの。……あ！ アッキーもそれ飲むの？」

弥生は百選を指差した。

「ん？ お、おう。え？ 弥生もこれ好きなの！？」

「すごい好き！ おいしいよね、これ。みんな私がこれ飲んだと変だつて言っただけど。よかったあ、アッキーもこれ好きなんだね！」

とてもうれしそうな弥生。

「このくせのある味がなんか良いよね！」

弥生もガラスの扉を開けて、百選を取り出す。

「そうそう、このなんともたとえようの無いくせが いいんだよね。

苦味を感じた後に微妙な甘さが残るところとか」

お茶の渋みについて語り合う俺たち。会話の内容なんてどうでもいい、話ができるだけで俺は幸せだ。

「家でゴロゴロしながらのんびりと飲みたくなるよね」

「うーん……塾があるからなあ。なかなか家で安らぐ時間がないのよね」

「ああ、そうなんだ。学校終わったあと忙しいものな、おまえは」
塾。さすが県内有数の進学校の生徒。弥生は昔っからさまざまな習い事をしていたが、高校になって塾の割合を増やされたと以前言っていた。俺らの学校で塾に通っているやつはあまり見かけない。高校生になるとグッと塾通いが少なくなった気がする。さすがに受

験前はまた変わってくると思うが。

当然、俺も通っていない。めんどくさかったり金がないということもあるし、塾なんて通うと帰りが夜になってしまうのであの感覚が俺を……

「あつ……！」

俺の中の浮かれ気分が一気にかすれた。辺りを見回す、あの人魂があるかもしれない！

「どうしたの、アッキー？」

「あ、いや……ちょっと……」

見える範囲の店内を見回す。とくに何も無い……か。あの感覚は無い。やっぱり、朝のあれは見間違いだったのか。

「アッキーどうしたの？ 誰か知り合いで聞いたの？」

戸惑いながら問いかけてくる弥生。

「あ……いや、なんでもなかった。あのさ、朝の人魂がどうか言うやつ。あれ、俺の見間違いだったみたいだから気にしないでいいよ」

「朝の……？ ああ、あのことなんか全然気にしてないよ。でも、もう怖がらせたりからかうのはやめてよね」

「からかったんじゃないくて、ほんとに見えた気がしたんだよ」

太陽の光のなんかだったのか、あの時はほんとに見えた気がしたんだ。さてよ、だったら昼間の女の子のあれも目の錯覚だったのか？

てことは……俺の目がおかしくなってるのか？ あれか、網膜はく離とか言うやつか！（？） ボクサーでもないのになぜ俺が！？

って、いくらなんでもあの女の子が錯覚つてのはありえないだろ。昨日の疲れで変な幻覚でも見たつてところか……でも、すべて幻覚でかたづけるのはいかなものか。

「やっぱり、アッキー相当疲れてるんじゃない？」

「大丈夫だよ。何も深刻なことなど無しだよ」

弥生に心配されると、「大丈夫だ」とついつい強がってしまう。気のせいかな、俺の返答を聞いた弥生の表情が曇ったように思えた。

レジで買い物済ませ二人は外に出る。ドアの前には青色の自転車が一台。それは弥生の自転車。弥生は青や水色が好きで、とくに快晴の日の青空を好む。あいにく今は夕方のオレンジが少し空に混じってしまったているが、この空もまた綺麗で見とれることに値するものだ。かすかにトラックの排気ガスを感じさせる薄暖かい風が、穏やかに流れている。

「アッキー」

自転車の横にいる弥生が良一のあだ名を呼ぶ。

「んー？」

ボサッと空を見ていたので、ぼやけた返事がでてしまった。

「……………」

じつと良一を見つめる弥生。月光と太陽光の狭間に揺れる虚ろな空。リアルにばやける住宅街の景色はその配下。その現実な景色に溶け込む、不安を帯びた弥生の表情。柔らかな白色の肌と潤う翡翠のような瞳、うつろいを湛える朧気な表情。世界中の秒針が時を刻むのをためらう。開かれる弥生の唇……

「アッキー……。私、何か変わった？」

情景から飛び出した暗い口調の問いかけ、予想もしない一言に戸惑う良一。

「変わった……？ いや、どうだろう。まあ、身長が伸びたとか……？」

なんて答えていいかわからない。とりあえず、当たり前に変わるであろっポイントを答える良一。

「……嫌な……性格になった？」

ナーバスな言葉が出てきた。これも良一に予想できるはずも無いものだ。

「え……？ い、嫌な性格？ ……そんなことないよ。昔と変わらざるのんびりしてるし。嫌味なんて感じない。……なんでそんなこと

思っ？」

戸惑いながら聞き返す。

「最近、高校に入ってからかな。アッキー、あたしを……避けてない？」

良一にとって心臓が止まってしまうかと思うほど衝撃的な一言。

何が衝撃的なのか？ 自分の心が変化したことを弥生に感じ取られたということが、この一言から推測できるからだ。

恋心に気づかれたわけではなく、嫌悪の感情を抱いていると思われるが、心に変化があったことに気づかれた。それだけでも良一の心拍数を限界まで引き上げるのに十分な一言となった。動揺を隠せない。しかし、その動揺の表情は弥生の不安感を一層あおってしまう。

「……………」

黙り込む弥生。

（嫌いじゃない、嫌いなのが無理。逆なんだ、「嫌い」の逆の感情なんだ、俺が弥生に抱いているのは……）

このまま黙っているわけにもいかない、けどなんて言えばいい？ 「好きなんだ」と言ってしまうか？ そんな雰囲気かよ！ いや、結構チャンスかもしれない。さてよ、弥生は俺のことどう思っているんだ？ この反応からみるとたぶん嫌われてるわけじゃない……？ ああ、でもどうする？ どうしよう？）

ぐつと思考を抑える。そこで浮かんだ言葉を話す。

「避けてなんかないさ。お互い学校が違うからなかなか会えない、ただそれだけのことだよ。だいたい幼稚園のころから一緒に遊んでいた仲だぜ？ いまさらちょこつとなんか変わったって嫌いになんかなんないって。それに、もしホントに避けてるのならお茶のはなしで盛り上がりたりしないだろ」

普通の、真ん中のセリフを言った良一。

「……そっか、そうだよ。ごめんね、最近なんかマイナス志向に

なっちゃってて。……ありがと、アッキー」

弥生の言葉に「なあに、どってことないさ」といった表情で答える。しかし心の中では「んもう、この意気地なし！チキン！！」と自分に対して叫んでいる良一。

「アッキー、明日久しぶりに遊ばない？……だめかな？」

いきなりのことに戸惑う。

「それは……二人で？」

「あ……でも、忙しいなら……」

「ひ、ひまヒマ！　すごい暇！　だからオッケー！」

たとえ学校があつてもサボるさ！　と、強く思う良一。

「よかったあ。じゃあ、12時ごろにアッキーの家に呼びに行つていい？」

「十二時だな。オッケー、了解！」

ちよつとハイな感じで答えてしまう良一。

「なんか久しぶりだよな、二人で遊ぶの。それじゃあ、約束、忘れないでね！」

そういつて自転車のペダルをこぎだす弥生。（忘れるものか！）心の中で満面の笑みを浮かべる良一。弥生と自転車はだんだんと遠くなり、影になる。オーソンの右側の通りは少し行くと結構な坂道になっているので、弥生の影が立ちこぎ姿になる。

影は夕焼け空の反対側にあるまだ青白い空へと駆け上がっていくように坂道を登り、やがて頂上付近で見えなくなった。見えなくなつてもまだ坂道の頂上を見続ける良一。オーソンに入る前のゲンナリ感などまったく忘れ、だらしない表情で突っ立っている。

上の空で岐路に着く良一。一見まともな表情をしているが、内心はデレデレでトロトロだ。心の充実を感じている。

しかし、油断の産物か無意識による逃避思想のせいなのか。良一

は忘れてはならないことを忘れてしまっていた。不気味な人魂や昨晩の非日常的な出来事を。

気づけることに良一は気づかなかった。オーソンから百メートルほど離れた位置にある小林弥生の家から、喚起と戸惑いの声が低く唸るように響いていたことに。

良一は知らなかった。刻一刻と迫り来る暗闇に包まれた未来から、黒い絶望と赤い変化が顔を覗かせているということに

つづく

第六話（後書き）

ベロが痛いです……しやれにならん。すみません、関係ありませんね。

それでは、読んでいただきありがとうございます。また次回！

第七話 / 夢心地（前書き）

•
•
•
•
•
•
○

それでは、どうぞ……！！！！！！

第七話 / 夢心地

この赤い世界で……

r・7

柴田荘に到着し、自宅である303号室に向かう良一。おさえてはいるが、そのニヤつきは隠しきれてない。

302号室の前を通りかかったとき、「斉藤」という表札がかかっているのがわかった。柴田荘では入居者が決まると、その入居する部屋に本人到着前から表札がかかる。今までこの部屋に住人はいなかった。ということは、近いうちにここに誰かが引越して来るということだ。

どんな人が入るのか、男か女か。そんなことを考えながら自宅の前で鍵を取り出す。ふと左隣の空き部屋、304号室を見る。そこには「一条」の表札がかかっている。

「……え！こつちも！？」

新年度開始前の三月や四月の初めならわかるが、四月の半ばにこんなに引越し人がくるなんてめずらしい。ここがオンぼるアパートの柴田荘だから余計にめずらしい。さらにそれらが両隣に来るなんて、不思議だ。

「まあ、なににせよ、これからは騒音とかに気を付けなければいけないな」

両隣に人がいれば、姉も気を使って少しはおとなしくなるかもしれない。そんなあわい期待を抱く良一。

錆びた扉を開けて部屋に入る。家に帰ったら手を洗ってうがい、美香に叩き込まれた習慣。まあ、当たり前っちゃああたりまえだが、自分の部屋に入ってフローリングの床に敷かれた薄いクッション

に飛び込み、ゴロンと横になる。天井を見ると弥生の顔が浮かんできた。

「はぁ……明日か……」

明日のことを考えてニヤつく。だらけた意識で暫く惚けたが、フツと気づいた。

「俺、どうしちゃったんだろ。中学まではあいつとごく当たり前のように遊んでいたのに。高校になったら突然心が変わっちゃった。あのころのままの気持ちでいられたら、こんなに深く考えなくてもすむのに。楽でいられるのに……」

視界にモヤがかかる。昨日のこともあるし、今日も一日中悩んでいたのでだいぶ肉体も精神も疲れている。気づくと、良一は夢の世界に入っていた。

白いスモークの立ち込める空間に恭平が見える。何してるんだろ？ 影絵の鶴のようなポーズを取りながら「何があっただよ！ 何があっただよ！」と叫んでいる。お前に何があっただよ、と思わずつつこんでしまうほど不思議な光景だ。

それにしてもめずらしい。夢の中にいるのに俺はこれが夢だと理解している。こういう夢はなかなか見れないものだ。

今度は姉さんが見える。ハンバーグを……叩き潰してる？ 姉さんの足元には幾つものハンバーグの残骸が……これは酷い。現実の姉さんはこんなことしない……あ、いや、うん。しないはずだ……。

おっ！ 今度は弥生が見える。こっちを見ている。夢の中なのに、照れるなあ。明日、どこに行こうかな。ボーリングとかいいかな。いや、だめか。あいつへたくそだからあんまり喜ばないかなやっぱり普通にどっか買い物に……。

っていつか、あれ？　なんか近づいてきたぞ……え！？　そ、そんな、キ、キスですか！？　ちよっと、いいのかよキスして……いや、こ、これは夢だ。夢の中でキスくらい……だめ！

卑怯だぞ俺！　こんなの正当法ではない！　でも男としてこれは……つて、ドンドン近づいてきてるううう！　ああ、近い、近いぞ！　た、たまらんこれは。くっ……！　って、目をつぶってどうすんだよ。意気地なし！　ああ、もう、いつてやる！　いくんだ良一！

……え。……な、なんだよ……これ。や、弥生？　そんな、目を開けたとたんになんで……なんで弥生が“黒い奴”になってるんだよ。

おい、弥生！　まって、何で離れていくんだよ！　まてよ、おい！　弥生、やよ……うわあああ！　なんだおまえら！　おい、どけ、どいてくれ！　弥生が、弥生が見えなくなる！　どけよ、どけつつてんだろ、この、黒いクソ野郎どもがあああああああああああああ
ああ………。

「誰がクソヤローだああ！！」

美香の怒号とともに良一の腕がメシメシと悲鳴を上げる。

「いぎやああ！」

良一の絶叫が柴田荘三階にこだました。

「寝言とはいえ、私への暴言は万死に値するのよ！　よく理解しておきなさい、この愚民め！　……夕飯できたから、早くいらっしやい」

そう言っで見下すような視線を一瞥してから、美香は良一の部屋を後にした。

「痛つつてえー。何が起こったんだよ、俺がいったい何をしでかし

たんだ！？ あれ？ 俺、どんな夢見てたんだっけ？ 思い出せないな。なんか悪い感じの夢だった気がするんだが……」

左腕をさすりながら悩む良一。

「え…… っと、たしか恭平が出演していた気がするんだが……」

「良一っ！」

六畳間のリビングから美香の怒鳴り声が響き、良一は慌てて部屋を出た。

「明日、あたし出張で一日帰ってこないから。帰りはあさっての夕方頃になるとおもっ」

夕食後、風呂上りの美香が良一に話しかける。

「……」

上の空の良一。

「ちよつと良一、聞いてんの？」

「え！ あ、うん。聞いてるよ、明日帰ってこないんでしょう？」

美香を見ると、さっきの夢を思い出せるような気がする良一。さつきから夢の内容が妙に気になってしまっている。

「ボケーっとしちゃって、すっかりしなさいよ。昔っからなんか抜けてるのよね、あんたは。明日どっか出かけるんだったら戸締りしつかりしてってね」

「わかってるよ」

「あ！ あと私がないときに料理しないように。火事は怖いわよ。それから冷蔵庫……」

「わかってるってば！ 俺はもう子供じゃないんだから。細かすぎるよ、姉さん」

いつまでもガキ扱いする美香の態度に反抗する良一。その美香の態度は母親の代わりを自分が勤めなければという責任感と、良一への愛情から来るものなのだが。どうにもそのへんのバランスはとりづらい。

「…… ったく、大体俺は料理できねーつつつの」

不機嫌に言い捨てる良一。“ガワシッ！”良一のあたまを背後から驚づかみにするゴッドハンド。

「あああああ！！！」

細くかよい指たちからにじみ出る圧倒的な粉碎パワー。くるみ割り、もとい頭割り機と化して良一の頭蓋を強烈に締め付ける。

「いだだだだ！」

「あんたがどう自分を評価しているかは知らないけど、私から見ただあなたは幼稚園上がりのハナタレ小僧レベルにすぎないわ。まだまだ子供の卒業証書はあげられない……よく、覚えておきなさい」

「わ、わかっ……ごめんなっさーいい！」

アイアンクローから解放され、頭を抑えてうずくまる良一。頭が手の平型に熱くなっている。

「じゃ、おやすみ」

美香は何事もなかったかのように部屋に入っていた。しばらくたってから良一もフラフラと立ち上がって自分の部屋へと向かった。

部屋の扉を引いて入る。いつもの見慣れた景色の中に、違和感を感じた。俺はその違和感の原因にすぐ気づいた。

感覚に狂いが無い！ 昨晚まで感じていたあの悪寒がまったく無い。夢の中のような感覚の中の出来事だったから（その後いろいろあったし）忘れていたが、昨日の激闘以来なんだか自分の体が変わった気がする。なんというか、あの世界に馴染んだ……そんな感がある。しかもそのせいかいつもの奇声も怒号も、生臭い獣臭も感じ取れない。なぜかは解からないが……とにかく、素直に嬉しい。

「ずいぶんとサッパリするものだな、ここ数年無かった普通の夜と
いつもの……静かだ」

部屋の中を見渡す。

「電気を、消してみるか」

蛍光灯の紐を引っ張ってみる。三度引っ張ると豆電氣も消えた。思わず目をつぶる。緊張が走る、背中が冷たい。ゆっくりとまぶたを開く。

目を明けて、夜の闇の中に突っ立っている自分が信じられない。夜の闇ってこんな感じだったっけ？カーテンを透き通ってくる月の光が明るく感じる。目を閉じ、再び開く。赤い世界は見えない。なんだか嬉しくて、布団の上に座り込む。もったいない感じがして寝る気になれない。しばらくカーテン越しに月の光を浴びて呆ける。

「明日のために、あんまり夜更かししないほうが良いな。……もう、寝るか」

横になって掛け布団を首までかける。今日は頭を覆うほどに布団をかぶる必要は無い、月の光も届かない本当の孤独の中で怯える必要も無い。

「今夜はぐっすりと熟睡できそうだな」

思い浮かぶのは弥生の顔。しだいに薄れていく意識、そして俺は眠りにつく……

つづく

第七話 / 夢心地（後書き）

読んでいただき、誠にありがとうございます！！！！！！

また次回！

第8話 / エクステンション・ブラック（前書き）

第8話です。

それでは、どうぞ！

第8話 / エクステインクション・ブラック

この赤い世界で……

第八話

午前七時半、「ジリリリリリリ、カチチャ！」

「ZZZ……」

午前七時三十五分、「ピリリリリリ、バンッ！」

「う……むう……ZZZ……」

午前十一時三十分。

「ZZZ……むが、ぬう……。むうん……。ぬ？むご！？」

時計を見て、バタバタと慌ただしく起きだす良一。約束の十二時まであと三十分しかない。

「この、役立たずどもめ！」

目覚まし時計たちに檄を飛ばす良一。それは怒りの矛先が違う。

目覚まし兄弟は良くやった、彼らの使命はきちんとこなしていたよ。怒るならベルを止めた自分を怒りなさい。

「ちよつと暗いかな、上をこっちに変えてみるか」

小さい鏡を精一杯に活用して服を選ぶ良一。乙女のそれと酷似した行動だが、彼としては初デートのつもりだからこの行動は彼なりの必死さの表れだ。結局、身だしなみを整えるだけで約束の時間になつてしまった。急いで朝食を食う。その後急いで歯をみがき、ゆつたりとティータイムを堪能する。良一は熱々のブラックコーヒーをすするように飲む。朝の目覚め時にはやっぱりブラックコーヒーが適当だと思ふ……。などと考えているうちにふと時計を見ると、針が一時をさしている。

「遅いな、弥生。」

近所に住んでいるので交通機関のトラブルはありえないが、何かあ

ったのかと心配する良一。

「ピインポーン」玄関のチャイムが鳴る。チャイムが鳴り止まぬうちに玄関に向かう良一。「ガチャツ、ギイイ」扉を開けた良一の目の前には青いＴシャツとチェック柄の上着に薄紫のスカートをはいた弥生の姿がある。

「こんにちは、アッキー」

笑顔の弥生。

「お、おう……」

良一は戸惑った。笑顔ではいるものの、弥生の顔は明らかに青ざめている。息も荒く、どうみても健康状態は良くない。

「遅れてごめんね。ちよつと寝坊しちゃって」

「あ、まあ、別にそれは気にしないよ……」

弥生は決して時間にルーズというわけではない。良一は昨日の寝坊も気になつてはいたが、二日連続で弥生が寝坊したということにさらなる違和感を感じた。

「今日、……どこ行く？」

元気そうに振舞おうとはしているが、眼光が虚ろだ。

「いや、ちよつとまてよ。弥生、おまえ風邪ひいてないか？具合悪そうだぞ」

「え……？ああ、そう言われてみると……そうかも」

「そうかもって……」

「大丈夫だよ、ちよつとふらつくくらいだから。せつかく……」

ガクツと体制を崩す弥生。ドアに寄りかかっている。

「ああ、ほら！危ない！ちよつとでもふらついてる時点で無理しちゃだめだって。今日は……ちよつとやめといたほうが良いよ。また、今度な」

「でも……」

残念そうな表情の弥生。

「ほら、次の土曜とかはどお？暇？」

「……うん」

「じゃあ、その日に延期つてことで。しょうがないよ、こんなにフラフラなんだから」

残念だが、弥生のことを思えばこの判断が賢明だ。

「わかった。約束だよ……」

「おう、約束だ。えーと、じゃ、家まで送るよ」

何か支えがないと立ってられないほどフラフラの弥生。その弥生に肩を貸す良一。さすがにおんぶする勇氣は無い。肩を貸す、それだけでも鼻血が出そうな良一。弥生の家までは約五分の道のり。隣近所という距離ではない。

「そんなフラフラなのに、よく一人でこれたな。あんまり無理すんなよ」

休日の昼の住宅街を歩く俺たち。小学生くらいの自転車少年をよく見かける。

「ごめんね、アッキー。自分から約束したのに……ごめんね」

切ないほどに弱い声で謝る弥生。

「な、なーに、気にすんなって。だって、風邪はしょうがないよ。

悪いのはウイルスどもだよ」

ほんとに気にしなくていい。だって今の状態でも大満足だから。

たった数百メートルだが、こんなに幸せな徒歩は初めてだ。

「……うん」

一言返事をして黙り込む弥生。……、しばらく無言の状態が続く。少し気まずい空気。俺らも昼下がりの住宅街も静かなので、弥生の苦しそうな吐息がインストウルメンタルのようにはっきりと聞こえる。不謹慎だがなんか、なんか……いい感じだ。

そうこうしているうちに弥生の家についてしまった。入り口には鉄柵の門があり、アーチもきちんと施してある。庭もあり、こちらも綺麗に整えられている。白い壁と屋根を持つ三階建ての一戸建て

の家は教会のように見える。なんかの植物のアーチをくぐって、玄関前で止まる。肩から弥生の手が離れた。

「んじゃ……、おだいじに」

病人へのお決まりの挨拶。うつむいたまま、まだ黙っている弥生。とりあえずこの場は退散したほうが良いのかな。右足を半歩後ろに下げる。

「アッキー」

沈黙を破って弥生が俺の名を呼ぶ。突然の優しいトーンのセリフに戸惑う。

「え。な、なに？」

「……ありがとう。昨日今日と久しぶりにアッキーといっぱい話せて、私……嬉しかった」

石版の並ぶ玄関前。その石版の上で、整頓された箱庭に住む草花たちに囲まれている弥生。風邪のせいかな、少し赤く染まっているほどが表情の優しさを増している。たぶん、俺の顔も赤く染まっているのだろうか。

「あ、ありがとうって……どうしたんだよ急に」

照れて頭をかく。

「……中学生の頃は毎日会ってたよね、同じクラスだったし。でも高校生になってから、別々の学校になってからはたまにしか会えなくなつて……たまに会っても通学中だからゆつくりできなかったし。だから、いっぱいしゃべれたのが嬉しかったの。だから、ありがとう」

弥生の笑顔が少しはにかむ。

「今日は、できれば無理してでも遊びたかった……一緒にいたい……から」

まるで風呂上りのように全身がほてる俺。これは……

「あ、あのさ。これからは……もっと連絡取り合おうか。できるだけいっぱい合えるように……さ」

根性だしてしぼり出した告白……に近いセリフ。

「……うん！」

明るく、まばゆい返事とともに俺を見つめる弥生。時が止まる。二人だけの世界、弥生以外がぼやけて見える。二人の視線が直線で結ばれる。

（あれ？この空気……え？そうなのか！？こ、こうゆうのっていきなり来るものなのか？……そうだ、思い出した！昨日の夢を。

そうだ、このシチュエーションだ。夢の中で起きたことと同じように、弥生の顔が少しずつ近くなってくる。ていつか俺が近づいている。

このあと、確か夢の中の俺は目をつぶったんだ。

今度は夢の中じゃない、現実の出来事だ。なんか突然の状況だがこれはチャンスだ、逃しちやいかん！よし、いくか、いくのか？いつてしまったらもう後戻りはできないぞ）

「弥生……」

見つめあう。極度の緊張と興奮、小心者の俺はそれらに耐え切れなくなり、視線を少し左上にそらす。

凍りついた。気管支で息が詰まる。

弥生の部屋の窓が視界に入ったとき、俺の精神に強烈な殺気が襲い掛かった。全身を貫く恐怖の衝撃、そして窓に見えるのは青白く禍々しく揺らめく人魂。突然の出来事に思考が混乱する。

「オオオオオオオオオオオオオ！」

馬鹿な！これは、この声と感覚は……！

「ア、アッキー……」

悲壮な弥生の声が聞こえ、弥生を見る。うずくまる弥生、息は荒いという段階を通り越し途切れ途切れになっている。

「ア、アッキー……苦……しい。……！」

弥生の苦しむ姿。さっきまでの夢のような状況はどこに行ったのか。混乱していた思考が落ち着き始め、何かが熱を帯びだした。

「野郎……」

沸騰している、俺の中で何かが猛り狂っている。

「はぁ……、はぁ……」

苦しむ弥生、意識も朦朧としているらしい。あの人魂が原因なのか？そういえば、誰かに見られている気がするって弥生が言ってたな。もしかして、ここ最近弥生を苦しめているのはあれなのか？今の状況も……？あの野郎、弥生をどうするつもりだよ。まさか……じわじわとなぶり殺してるんじゃないよな？

「う……う。くぁ……あっ」

「ウゴオオオオッオオオアアア！」

この野郎、人魂のくせに吼えてんじゃねえよ。ていうかこの叫び声は、あの赤い世界の奴の似てるな。ああ！？なんだ、またかよ。

今度は弥生かよ……………ざけんなよ……

まぶたを閉じる

脳裏に直接声が聞こえる

無意識のうちに閉じたまぶたがゆっくりと開かれる

世界が動く、大気がビリビリと震えるのがわかる。瞳を見開いた良一は、赤い世界に突入した。この真紅の世界よりも赤く燃え上がる怒りの感情を滾らせながら……………

そこから50メートルほど離れた一軒家の屋根の上から、一連の様子を静観する少女。寺高の制服姿。その赤い瞳には良一の黒く蠢く姿がはつきりと映し出されている……

うん

第8話 / エクステインクション・ブラック（後書き）

どうもです！ 読んでいただき、誠にありがとうございます！

そろそろ佳境……。

第9話 / 混迷（前書き）

第9話です。よろしくお願いいたします。

第9話 / 混迷

この赤い世界で……

第9話

良一は感じていた、今の状況の自然さに。いつもの夜や一昨日の夜とは違い、今の自分には不自然さが無い。この真紅に染まった世界の中で、眼球にまったく痛みを感じない。この世界独特の生臭さも気にならず、むしろ心地良い香りに感じる。

黒い塊が弥生の部屋の窓（と思われる枠線）からズルズルと壁に塗りつけたとろろ芋のように流動的にたれ落ちてくるが、その光景を見ても身震いひとつしない。まるで恐怖の感情を忘れてしまったか、もしくは自分と対象との力量差に絶対の自信があるかのように「……」

見下し、威圧するように黒い塊をにらみつける良一。彼は初めての精神状態を受け入れる。「キレる」という本能と怒りの精神を。

「離れ口、その子」はワたしのモノ」

黒い流動体の塊は地面に到達すると、低くしゃがれた音声でうめく様に言葉を発しながら、しだいに小山のように盛り上がっていく。この世界では建物内などの床は赤いが、大地は漆黒の色をしている。はるか上空もそうだ。この世界において大地や空は何か特別なものなのだろうか。

大地の漆黒と違い、何かうごめくというか渦巻くように見えるため、大地と黒い奴の区別は容易につく。

「一緒にいルんだ、二人キリで……。オマエはどつかイけ……。逝つてしまエ！」

高さが二メートルくらいになり、変化が止まったその黒い塊は良一を威嚇する。巨大な一つ目の赤眼が堂々と見開かれ、その中の黒

い瞳孔が細くとがる。

突如生える黒い針のような尖り。それが良一めがけて伸びる。より細く、鋭利に、どんどん鋭利、もっと鋭利に！

良一の黒く変化した肉体を抵抗なく貫けるように尖り迫る。

「うざいな……」

右手を前方へ無造作に突き出す良一。突き出された右手のひらに尖った最前線が触れる。注射針よりも鋭利で巨大な針が良一の腕の中に入り込み、抵抗も無く神経も血管も貫いた……かのように見えた。

しかし、先端から何の抵抗も無く当たり前のように見えなくなっていく針は、良一の右腕に進入できてはいなかった。消えていたのだ、先端から消滅するように。針の伸びるスピードがなまじ速すぎたため、黒い塊は痛みを感じる間もなかったのだろう。伸びきった針の全長の半分ほどを失ったところで異変に気づき、また激痛にも気づいた。

「あ……嗚呼あ……。亜あア、ア、ア……！！」

絶叫する黒い塊。急いで残った針を体内に戻す。右腕に不思議な高揚を感じながらゆっくりと歩み寄る良一。その表情には人間味が感じられない。無感動に、ただひたすらに殺意のみを原動力として行動しているように見える。

「お前は何者なんだ？お前らは何なんだ？答えろ」

一歩一歩、一定のリズムで迫る良一。

「一緒に良いんだ。モウ、一人はヤダ……」

もともと収縮する黒い塊。

「知性がないな。それじゃあ俺の質問の答えにならないだろ」
何かに気づいたのか、その場で歩みを止める良一。

「サミシイ……戻りタイ。ヒトリボツチ？ ……イヤダ、イヤ

ダああ！」

一瞬早かった。黒い小山から噴出すように、無数の針が飛び出すより一瞬早く。良一の右腕が黒い塊の体内に突き刺さった。

「ああ嗚呼アアア……………コンドハどうなる？この後、ワタシハどうなるンダ……………」

しゃがれにかすれが混じった苦しみの言葉を何とか発する黒いそれ。

「さあな、天国はあきらめたほうがいいぜ」

黒い塊の体内にめり込んでいる良一の右腕が振り上げられた。今度は本体と思われる小山形の部分の、良一の右腕が通過した部分が瞬間的に消える。

「嗚呼あ……………サみしいヨ……………弥生……………」

「！！！！」

最後の一声が消えるのと連動するようにチリとなっていた黒い塊。

「ま、まで！なぜ弥生という名を……………やはりお前らは狙ってきているのか！？」

良一の問いかけに答えられるはずも無い。すでにチリとなって消えてしまっている。

「ホントに、何なんだよやつらは……………うっ！！」

突然のめまいに襲われる良一。ぐるぐると赤い世界が回っているかのようだ。吐き気の襲来に悶える。やがてめまいが治まり、そこには先ほどまでの殺伐とした赤の世界はなくなっている。どっかのイヌの鳴き声とともに、いつものカラフルな世界が良一を迎えてくれた。変化に対応しきれず呆然とする良一。

「……………はっ、弥生！！」

あわてて弥生の元に駆け寄る、弥生はまだ意識を失っている。それに熱も引いていない。さっきとなんら変わらない状況だ。

「おい、弥生！しっかりしろ、目を覚ませ！！」

弥生の意識は戻らない、気が動転する良一。

「何で？何で？あいつは倒したのに！あれが原因じゃないのか？」

左手で頭をガシガシとかいてあせる良一。

「と、とりあえず、救急車！！」

119にコールする。このまま死んでしまったらどうしよう。そんな考えが頭をめぐる。

自分が情けなく、目頭が熱くなる。

「どいて」

不意に、後ろから声がした。

「は、へえ？」

絶望のためか、無気力な返事をする良一。

「いいからどいて！この子を助きたいんですよ」

寺高の制服を着た少女は良一をグイツと無理やりどかす。

「え？ あ、おまえ……昨日の……？」

良一は戸惑った。目の前に突然現れたのは、昨日の昼に会った人魂の少女だったから。少女は弥生の額に右手を当てている。

「あ、あの……なんで君が……」

「言いたいことは大体解かるわ。後で聞いたげるから、今はとにかく黙ってて！」

かわいらしい声に似合わず、てきぱきとした口調でしゃべる少女。

「は、はい。よろしく頼みます」

もう精神的にも平常状態に戻っているらしい。

「……だめね」

「えは！？だ、だめ！！？」

鼻水が飛び出すほどビビる良一。

「駄目って言っても私じゃ完全に治癒できないって意味よ。とりあえず病院で入院してれば生きることができるわ……鼻水でてるわよ」

「あ、はい……なるほど……グシュッ（ティッシュで拭いた音）。

「はあ、あのー。君は医者卵かなんかなの？」

「質問は後って言うてるでしょ。それに生きることとはできるって言ったって、点滴とか生命維持装置を使えばとりあえず生きてはいる状態にはなるってことよ。……つまり、植物状態ね」

「し、植物……うそだろ！？」

会話をさえぎるように救急車のサイレンが慌ただしく鳴り響く。

良一はそのサイレンも聞こえないほどに驚愕し、放心状態になって
いた……

つづく

第9話 / 混迷（後書き）

読んでいただき、誠にありがとうございます。

それでは、また次回。

第十話 / この赤い世界で

この赤い世界で……

第10話

白を基調とした清潔な病院の個室の中、一通りの検査が終了した小林弥生は真つ白なベッドの上で眠っている。生きながらえるために必要な、生命維持装置につながる管を鼻と口につけられて。

その横でうなだれる良一の頭の中は、この白い病院の中でもっとも白いものとなっている。「このまま弥生が目覚まさなかったらどうしよう……」そんなことを考えては不快な想像から逃避するようにならなくなる。その繰り返し。病室内には静寂の時が流れる。

聞こえてくる心電図の音、「ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……」

静寂を誇張する人工音。

「弥生ちゃんっ！……！」

静かな空間の扉を慌ただしく開き、乱入してきた一人のサンングラスをかけた派手な女性。

「おばさん……」

突然の来客、しかしそれは良一が連絡を入れた弥生の母（小林ミコト）だった。

「はっ！……ああ……弥生、私のかわいい弥生ちゃん。いったい、どうしてこんなことに……？」

病室の入り口で弥生の姿を見たとたんに崩れ落ちるミコト。

「社長、お気を確かに！」

そのミコトの体を支えたがっちりした体格の中年男性は、ミコトの秘書を務める野村俊二。ミコトは某高級ブランドの日本支社の総

括をしている年収5億を超えるスーパーキャリアウーマンだ。一人娘の弥生を溺愛している親バカでもあるが、その半面様々な習い事を叩き込んでいるお教育ママでもある。

「！秋山君。どうも……連絡ありがとうね。救急車も呼んでもらうて……」

昔から何度も会っているの、良一のことをよく知っているミコト。秋山家とはいろいろと縁がある。

「今日……弥生と一緒に遊ぶ約束をしてたんです。その約束をまもらうと、弥生は風邪を引いているのに無理をしてしまった……だから、俺にも責任があります。どうもすいません……」

「いいえ、それはちがうわ。……悪いのは私。私が毎日きちんと家に帰ってあげていれば、もっと弥生に気を使ってあげていれば。もっと……うつ……」

泣き出すミコト。

「社長、しっかりしてください！社長は大会社の社長ですから、家庭のことが多少ないがしろになるのは仕方のないことです」

なぐさめる秘書野村。

「会社と娘の命を同じ天秤に乗せるつもり！！？」

ミコトの怒声が木霊する。沈んだ空気の病室。「ピッピッピッ……」

……一定のリズムを刻む心電図、弥生の命のリズム。「ガチャリ」開く扉、入ってきたのは白衣の医者と看護師。

「小林弥生さんのお母様ですか。私はこの病院の総……」

「先生！弥生は、弥生の状態は！？ど、どうなってしまうんですか？」

「落ち着いてください、小林さん。検査の結果、お嬢さんの体に異常は見られませんでした」

一瞬の間の後、病室に安堵の空気が流れる。「ふうー」と息を吐き出す良一。

「ですが……」

医者の言葉に続きがある、息が詰まる良一。

「異常がないというところが問題でして……異常は見つからなかったのですが、娘さんの命は現在大変危険な状況にあります。生命維持装置でなんとかつなぎとめています。このままでは……」

言葉を詰まらす医者、再びの静寂。しかし心電図の音は良一の耳に届かない。

「このままでは……？このままではどうなるっていうの！？まさか、まさか弥生が死んでしまうって言うんじゃないわよね？」

「……このままの状態が進めば、おそらく……もってあと一ヶ月とあったところでしょう」

「！！！！！！ ひっ、……ひっかげっ……！！？」

また崩れ落ちるミコト。

「社長！お気を確かに！」

それを支える秘書野村。医者の言葉に良一は精神を吹き飛ばされてしまったような感覚をおぼえた。視界がぼやける、真っ白になる。そこに唯一見えるのは弥生の安らかな寝顔、そして生命維持装置。やがてそれも消える。

もう、何も見えない。

「小林さん、しっかりとしてください」

「社長、しっかりと！」

二人の言葉に反応してゆっくりと体を起こすミコト。

「せ、先生……弥生を、私の弥生ちゃんを助けてください！私たちは二人だけの家族なんです！この子がいなくなったら……」

医者にすがりつくミコト。

「こちらも全力を尽くしますが、原因が解らないのでどうにも対処のしようがなく……」

「た、対処できない！？ そんな……あなた医者でしょう、こんな大病院の！ お願い、何とかして、助けて！」

「私共も全力を尽くしてさまざまな手段を思案したのですが……」

「あ……ああ……そんな、そんなあ……弥生、私のかわい、い……弥、生……」

フラフラと寝たきりの弥生にすがりつくミコト。無力かな、母の

流す涙は娘の精神に宿る黒い闇を晴らすことができない。弥生のまぶたは閉じられたままだ。悲痛なミコトの泣き声を背に、病室を後にする良一。

白色の扉を閉める。

張り付けてある「小林弥生」の札、扉越しにも聞こえるミコトの泣き声。

うつろな視線で病院の静かな廊下を歩く。通りかかった待合室、自動販売機と幾つも並ぶ椅子。5つある椅子の真ん中に座る。うつむき、組んだ自分の両手の指を見つめる。後ろには二組の窓、夕日が差し込んでいる。

「いったでしよ、“とりあえず生きることとはできる”って。……思っただけでも時間が無いみたいだけどね」

「静寂の待合室に透き通るような少女の声が響く。反応の無い良一。現実を知ってどう思った？ 絶望した？」

「かすかに聞こえる自動販売機の起動音。」

「……泣いてるの？」

「同じ間の繰り返し。」

「そうやって、いつまでもふさぎ込んでいるつもりなの？このままあの子を失うことを恐れて神様にでも祈り続けるの？」

一粒の水滴が瞳という水源からほほを伝う。

「祈るだけじゃ……何にもならない」

右の親指を左の親指で押さえつける。

「弥生は助かる……あの赤い世界にそのヒントがある」
「搾り出すようにセリフをはく良一。」

「……勘がいいね。うん、彼女は助かるよ」

ほほを伝う水滴が表面張力から開放され、雫となって床に落ちた。
「教えてくれ、知っているんだろ。あの赤い世界のことを、弥生を助ける方法を……」

震える声。

「いいけど、覚悟はできているの？ 命を賭ける覚悟が」

全身の震えを押さえ、目をつぶる良一。深く、細く息を吐く。

「賭ける命は二つよ。あなたとあの子の命、それを賭けて身を投じるのよ。ま、途中で逃げようと思えばあなたの命は助かるけど」

「覚悟はできている。俺は絶対に逃げない……。必ず助ける、あいつの笑顔を取り戻す」

握られる右拳。目を見開く良一、赤眼が虚空を睨みつける。

世界が赤く染まり、大気が良一の殺気に震えた。

「俺は、この赤い世界で……」

良一の強固な決意に共鳴するかのように赤い世界が揺らめく。まるで、喚起かんきの声を上げるかのように

この赤い世界で…… 完

第十話 / この赤い世界で

(後書き)

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございます。

これにて、「この赤い世界で……」“は”完結となります。
。

それでは、またお目にかかる日まで……………。

と思っただけもう会えることになりました。
それでは、『赤い世界』で会いましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9003l/>

この赤い世界で.....

2010年12月19日04時38分発行